



Asset Manager

ソフトウェアバージョン: 9.60

Windows®、Linux®オペレーティングシステム

インストールとアップグレード

ドキュメントリリース日: 2016年6月

ソフトウェアリリース日: 2016年6月



Hewlett Packard
Enterprise

ご注意

保証

Hewlett Packard Enterprise製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載は、追加保証を提供するものではありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、Hewlett Packard Enterpriseはいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

機密性のあるコンピュータソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、Hewlett Packard Enterpriseからの有効な使用許諾が必要です。商用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211および12.212の規定に従い、ベンダの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

著作権について

© 1994 - 2016 Hewlett Packard Enterprise Development LP

商標について

Adobe™は、Adobe Systems Incorporated (アドビシステムズ社) の登録商標です。

Microsoft®およびWindows®は、米国におけるMicrosoft Corporationの登録商標です。

UNIX®は、The Open Groupの登録商標です。

この製品には、「zlib」汎用圧縮ライブラリのインタフェースが含まれています。Copyright © 1995-2002 Jean-loup Gailly and Mark Adler.

ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別情報が記載されています。

- ソフトウェアバージョンの番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメントリリース日は、ドキュメントが更新されるたびに更新されます。
- ソフトウェアリリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

更新状況、およびご使用のドキュメントが最新版かどうかは、次のサイトで確認できます。<https://softwaresupport.hpe.com/>.

このサイトを利用するには、HPE Passportへの登録とサインインが必要です。HPE Passport IDの登録は、HPEソフトウェアサポートサイトの [Register] をクリックするか、HPE Passportのログインページの [Create an Account] をクリックします。

適切な製品サポートサービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HPEの営業担当にお問い合わせください。

サポート

次のHPEソフトウェアサポートサイトをご覧ください。<https://softwaresupport.hpe.com>

このWebサイトでは、HPのお客様窓口のほか、HPEソフトウェアが提供する製品、サービス、およびサポートに関する詳細情報をご覧いただけます。

HPEソフトウェアオンラインではセルフソルブ機能を提供しています。お客様のビジネスを管理するのに必要な対話型の技術サポートツールに、素早く効率的にアクセスできます。HPEソフトウェアサポートのWebサイトでは、次のようなことができます。

- 関心のあるナレッジドキュメントの検索
- サポートケースの登録とエンハンスメント要求のトラッキング
- ソフトウェアパッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HPEサポート窓口の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェアカスタマとの意見交換
- ソフトウェアトレーニングの検索と登録

一部のサポートを除き、サポートのご利用には、HPE Passportユーザーとしてご登録の上、サインインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HPE Passport IDの登録は、HPEソフトウェアサポートサイトの [Register] をクリックするか、HPE Passportのログインページの [Create an Account] をクリックします。

アクセスレベルの詳細については、次のWebサイトをご覧ください。<https://softwaresupport.hpe.com/web/softwaresupport/access-levels>

HPE Software Solutions Nowは、HPEソフトウェアソリューションと統合に関するポータルWebサイトです。このサイトでは、お客様のビジネスニーズを満たすHPE製品ソリューションを検索したり、HPE製品間の統合に関する詳細なリストやITILプロセスのリストを閲覧することができます。このWebサイトのURLは <http://h20230.www2.hp.com/sc/solutions/index.jsp>です。

目次

第1章: はじめに	8
このガイドの対象ユーザ	8
このガイドの使用目的	8
Asset Managerデータの保全性に関する注意	9
第2章: Asset Managerのコンポーネント	10
Asset Managerのパッケージ	10
Asset Managerモジュール	11
周辺プログラム	11
第3章: サポートされる環境	13
サポートされるオペレーティングシステム	13
Windowsでの最小システム構成と推奨システム構成	14
必要最小限の動作環境	14
推奨される動作環境	14
サポートされるDBMS	15
第4章: 旧バージョンからアップグレードする	17
Asset Managerのアップグレード - 概要	18
アップグレード手順の構成	18
必須要素	19
設定ファイルをバックアップする	19
Asset Managerプログラムをアップグレードする	19
アップグレード手順	20
Asset Managerが正常に起動することを確認する	21
Asset Manager Webをアップグレードする	21
Asset Managerデータベースにアクセスする外部プログラムをアップグレードする	22
HPE Connect-Itシナリオ	22
その他の外部プログラム	22
第5章: Windowsでのインストールとアンインストール (Asset Manager Webを除く)	23
Asset Managerインストール前の注意事項	24
Oracleクライアント層のインストール	24

SAP Crystal Reportsのインストールの有無	24
Windowsへのインストール	24
クライアント/サーバ型 インストール	25
クライアントコンピュータへ迅速にインストールする	25
複数言語でのAsset Managerのインストール	26
Asset Managerを64ビットWindowsシステムにインストールする	26
手動インストール(GUI)	26
手動アンインストール(GUI)	28
Asset Managerアンインストール前の注意事項	28
デモ用データベースをインストールした場合	28
Webクライアントをインストールした場合	29
Asset Managerをアンインストールする	29
自動インストールとアンインストール(コマンドライン)	30
概要	30
準備	31
Orcaをインストールする	31
Orcaの使用に関するヘルプの取得	31
「.msi」ファイルとsetup.exeおよびmsiexec.exe/パラメータに関するヘルプを 取得する	31
Asset Managerインストールを設定する	31
実行	33
概要	33
コマンドラインからインストールを実行する	34
コマンドラインからアンインストールを実行する	35
第6章: Windowsでの設定 (Asset Manager Webを除く)	37
Oracle DLL	37
メッセージシステム	38
Asset Manager Automated Process Manager	39
SAP Crystal Reports	41
一連のコンピュータへのソフトウェアの配布	41
HPE Connect-Itとの統合	41
デモ用データベース	42
データベースへの接続	43
第7章: Linuxでのインストールと設定 (Asset Manager Webを除く)	44
Asset Managerのインストール	44

Asset Manager Automated Process Managerの導入	47
Windowsインタフェースで初めてAsset Manager Automated Process Managerを構成する	48
Asset Manager Automated Process ManagerがAsset Managerデータベー スに正常接続することを確認する	50
Webインタフェースを使ったAsset Manager Automated Process Managerの 設定を可能にする	51
Asset Manager Automated Process ManagerをWebインタフェースで設定 する	52
APIを使用してAsset Managerデータベースにアクセスする	52
第8章: Asset Manager Webのインストール、設定、および削除	54
Asset Manager Webアーキテクチャ	55
Asset Manager Webのインストール	56
実用例	56
インストールの概要	60
Asset Manager Webのインストールの準備	61
インストールするコンポーネント	61
アプリケーションサーバの設定 - 特別な場合と例	63
取得するライセンス	66
パスワードの暗号化	67
Webサービスのタグ付け	67
Webサービスに関連付けられた機能ドメインの一貫性の確認	67
アーカイブファイルを更新する	68
「.properties」ファイルを編集する	68
キーファイルの生成	84
展開スクリプトを使用してアーカイブファイルを更新する	85
アーカイブファイルをアプリケーションサーバに展開する	88
Tomcatがアプリケーションサーバの場合	88
WebSphere Application Serverがアプリケーションサーバの場合	91
WebLogicがアプリケーションサーバの場合	97
Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを同時にイン ストールする	100
展開が成功したかどうかテストする	104
Asset Manager Web Serviceが正しく展開されたかどうかテストする	104
Asset Manager Web Tierが正しく展開されたかどうかテストする	105

Asset Manager Webの設定	106
Internet Explorerを使ったAsset Managerへのアクセス	106
Asset Manage Webの最適化	106
Tomcatのログファイル	106
Tomcatによって生成されるページの表示にかかる時間	107
ネットワークパフォーマンス	108
Asset Manage Webのアンインストール	109
Apache Tomcatがアプリケーションサーバの場合	109
WebSphereがアプリケーションサーバの場合	109
WebLogicがアプリケーションサーバの場合	110
問題	110
Asset Manager Web	110
問題	110
解決策	110
Tomcatで実行されるAsset Manager Web Tier	111
問題	111
解決策	111
第9章: 「.ini」、「.cfg」および「.res」ファイル	112
使用可能な「.ini」、「.cfg」および「.res」ファイル	112
「.ini」ファイルを変更する	116
「am.ini」ファイルのエントリ	117
[OPTION] セクション	117
[SQL] セクション	119
「amsrv.ini」ファイルのエントリ	119
[OPTION] セクション	119
「amsrvcf.ini」ファイルのエントリ	120
「amexp.ini」ファイルのエントリ	120
[OPTION] セクション	120
「amdb.ini」ファイルのエントリ	120
「.ini」ファイルの変更を抑制する	122
第10章: OpenSSLとOpenLDAPを使用する	123
第11章: パフォーマンスの考慮事項	124
ドキュメントのフィードバックの送信	125

第1章: はじめに

この章の内容

このガイドの対象ユーザ	8
このガイドの使用目的	8
Asset Managerデータの保全性に関する注意	9

このガイドの対象ユーザ

このガイドはAsset Manager 9.60を使用するすべての企業を対象としています。

このガイドは、特に以下のことを実行するエンジニアを対象としています。

- Asset ManagerとAsset Manager Webを初めてインストールする
- 旧バージョンのAsset Managerをアップグレードする

このガイドの使用目的

このガイドでは、以下を説明しています。

- Asset Managerを構成するプログラム
- Asset Managerの動作環境
- 旧バージョンのAsset Managerのアップグレード方法
- Asset ManagerとAsset Manager Webを初めてインストールする方法
- Asset Managerの設定方法
- Asset Managerの性能の最適化

ヒント: このガイドで説明されている手順には忠実に従ってください。

Asset Managerデータの保全性に関する注意

Asset Managerは多彩な機能を搭載しています。この多機能は、複雑な構造のデータベースを使用することにより実現されています。

- データベースは大量のテーブル、フィールド、リンク、およびインデックスで構成されます。
- 一部の中間テーブルは、グラフィカルインターフェースには表示されません。
- 一部のリンク、フィールドとインデックスは、ソフトウェアにより自動的に作成、削除または変更されます。
- ユーザはテーブル、フィールド、リンクやインデックスを追加作成することができます。

データベースの保全性を保護しつつその内容を変更する場合、以下のアプリケーションの内の1つを使用する必要があります。

- Windowsクライアント
- Asset Manager API
- Asset Manager Import Tool
- Webクライアント
- HP Softwareゲートウェイ
- HPE Connect-It
- Asset Manager Automated Process Manager
- Asset Manager Web Service

データベースの保全性を保護しつつその構造を変更する場合、Asset Manager Application Designerを使用する必要があります。

注意: データベースの内容や構造を、ソフトウェア用にあらかじめ用意された方法以外の手段で変更しないでください。不適切な方法で変更すると、データベースが破損し、以下の問題が発生する可能性があります。

- データやリンクが勝手に削除または変更される
- 架空のリンクやレコードが作成される
- 重要なエラーメッセージが発生する

第2章: Asset Managerのコンポーネント

Asset Managerのパッケージ	10
Asset Managerモジュール	11
周辺プログラム	11

Asset Managerのパッケージ

プログラム名	プログラムのインターフェース	Windowsのサポート
Asset Managerデータベースへのアクセス用Windowsインターフェース	グラフィック	はい
Asset Managerデータベースへのアクセス用 Webインターフェース	グラフィック	はい
Asset Manager Export Tool	グラフィック	はい
	コマンドライン	はい
Asset Manager Import Tool	コマンドライン	はい
Asset Manager Automated Process Manager	グラフィック	はい
	コマンドライン	いいえ
Asset Manager Application Designer	グラフィック	はい
	コマンドライン	はい
Asset Manager API	非 グラフィック	はい
Asset Manager Webサービス	非 グラフィック	はい
Asset Manager Script Analyzer	グラフィック	はい
HP AutoPass License Management Tool	グラフィック	はい

Asset Managerモジュール

WindowsおよびWebインタフェースからAsset Managerデータベースに接続すると、次のモジュールにアクセスできます。

マーケティング名	[ファイル/モジュールの管理...]メニューによって表示される名前 (Windowsクライアント)	[アクション/データベースの有効化]メニューによって表示される名前 (Asset Manager Application Designer)	HP AutoPassによって表示される名前
AM資産ポートフォリオ	管理	Admin (管理)	
AM資産ポートフォリオ	資産ポートフォリオ	ITAM (資産ポートフォリオ)	資産ポートフォリオ ServiceCatalog
AM資産ポートフォリオ	バーコード棚卸	バーコード (バーコード棚卸)	BarCode
AM資産ポートフォリオ	クライアント自動化との統合	OVCN (クライアント自動化との統合)	OVCN
AM契約管理	契約	契約 (契約)	契約
AM契約管理	契約	リース (リース管理オプション)	リース
AMソフトウェアアセット管理	ソフトウェア資産管理	SAM (ソフトウェアアセット管理オプション)	SAM
AM財務管理	ファイナンス	ファイナンス (ファイナンス)	財務
AM調達	調達	調達 (調達)	調達
AM資産ポートフォリオ	ヘルプデスク	ヘルプデスク	

モジュールへのアクセスの可否は、Asset Manager付属のHP AutoPassライセンスキーに応じて異なります。『管理』ガイドの「[ライセンスキーをインストールする](#)」の章を参照してください。

周辺プログラム

以下のソフトウェアはAsset Managerに統合可能です。

- HPE Connect-It
- SAP Crystal Reports
- HPE Discovery and Dependency Mapping Inventory
- HPE Project and Portfolio Management
- HPE Universal CMDB

注: Asset Managerをインストールすると、<AMInstallDir>\integrations\ucmdbフォルダに AMGenericAdapterAPI_<version>.zipおよびAMPushAdapterAPI_<version>.zipファイルが作成されます。これら2つのzipファイルには、Asset Managerアダプタ用のAPIが含まれており、これらをUCMDBに展開できます。

- HPE Service Manager
- OpenSSLとOpenLDAP

第3章: サポートされる環境

サポートされるオペレーティングシステム	13
サポートされるDBMS	15

サポートされるオペレーティングシステム

Asset Managerクライアントプログラム

Asset Managerクライアントプログラムは次のオペレーティングシステムをサポートします。

- Windows
- Linux

サポートされているオペレーティングシステムのバージョンについては、サポート表 (<https://softwaresupport.hpe.com/group/softwaresupport/support-matrices>) を参照してください。

『インストールとアップグレード』ガイドの「サポートされる環境」の章の「サポートされるオペレーティングシステム」のセクションの「Asset Managerクライアントプログラム」を参照してください。

Asset Managerデータベースサーバ

サーバは、DBMSにサポートされている全オペレーティングシステムとハードウェアプラットフォーム上で機能します。

DBMSにサポートされているオペレーティングシステムとハードウェアプラットフォームのリストは、DBMSのドキュメントを参照してください。

Windowsでの最小システム構成と推奨システム構成

必要最小限の動作環境

Asset Manager Automated Process Manager、Asset Manager Web、Asset Manager Web Service以外の全プログラム

環境	Windows 7、Windows 8、Windows Server 2008 R2およびWindows Server 2012
CPU	Intel Xeonまたは同等
RAM	2GB
ディスク容量 (*)	4GB (全パッケージをインストール)

(*) Asset Managerにインストールされるファイル用に約700MBのディスク容量が必要です(本番データベースとクライアントデータベースのレイヤを除く)。

Asset Manager Automated Process Manager

環境	Windows Server 2008 R2およびWindows Server 2012
CPU	Intel Xeonデュアルコアまたは同等
RAM	Asset Manager Automated Process Manager用に1GB
ディスク容量	4GB

推奨される動作環境

Asset Manager Automated Process Manager、Asset Manager Web、Asset Manager Web Service以外の全プログラム

環境	Windows 7、Windows 8、Windows Server 2008 R2およびWindows Server 2012
CPU	Intel Xeonまたは同等
RAM	4GB
ディスク容量 (*)	50GB (全パッケージをインストール)

(*) Asset Manager (クライアントのみ)にインストールされるファイル用に約350MBのディスク容量が必要です (本番データベースとクライアントデータベースのレイヤを除く)。

Asset Manager Automated Process Manager

環境	Windows Server 2008 R2およびWindows Server 2012
CPU	Intel Xeonクアッドコアまたは同等
RAM	Asset Manager Automated Process Manager用に2GB
ディスク容量	4GB
ネットワーク	DBMSサーバとの高速リンク(例: Ethernet 100Mbps、Gigabit)と最短待ち時間 (<5 ms)

Asset Manager Web

Asset Manager Webのサポートに必要な構成については、『**AM Sizing Guide Using Oracle DB2 or MSSQL (Oracle DB2またはMSSQLを使用したAMサイズガイド)**』を参照してください。このホワイトペーパーは、『**Release Notes**』の「**Related documentation**」の章、「**Asset Manager reference documents/White papers**」のセクションに記載された場所に配布されます。

サポートされるDBMS

Asset Managerデータベースでは、以下のDBMSがサポートされています。

- Microsoft SQL Server
- Oracle Database Server
- IBM DB2 UDB

サポートされているDBMSのバージョン (サーバ、クライアント、ネットワークプロトコル、ドライバなど) についてはサポート表 (<https://softwaresupport.hpe.com/group/softwaresupport/support-matrices>) を参照してください。

注意: サポート表に記載されているバージョンまたはサービスパック以外 (以降も含む) のDBMSで

Asset Managerを使用すると、正常に機能しない場合があります。

注意: それぞれのベンダがサポートしなくなったバージョンまたはサービスパックでAsset Managerを使用すると、正常に機能しない場合があります。

第4章: 旧バージョンからアップグレードする

Asset Managerのアップグレード - 概要	18
アップグレード手順の構成	18
必須要素	19
設定ファイルをバックアップする	19
Asset Managerプログラムをアップグレードする	19
アップグレード手順	20
Asset Managerが正常に起動することを確認する	21
Asset Manager Webをアップグレードする	21
Asset Managerデータベースにアクセスする外部プログラムをアップグレードする	22
HPE Connect-Itシナリオ	22
その他の外部プログラム	22

アップグレードタイプは、インストール済みのバージョンによって異なります。

Asset Managerバージョン番号別のアップグレードタイプ

アップグレードするバージョンの番号	実施する作業	参考ドキュメント
バージョン4.2.x、4.3.x、4.4.x、5.0x、または5.1x	<ol style="list-style-type: none">Asset Managerプログラム (バイナリファイルと設定ファイル) を5.20～9.31のバージョンにアップグレードします。データベースを対応する形式に移行します。たとえば、手順1でAsset Managerプログラムをバージョン4.2.0からバージョン5.20にアップグレードした場合、4.2.0フォーマットのデータベースを5.20フォーマットのデータベースに移行する必要があります。Asset Managerプログラムをバージョン5.20～9.31から	<p>Asset Managerプログラムのアップグレード方法の詳細については、この章の「Asset Managerプログラムをアップグレードする」(19ページ)のセクションを参照してください。</p> <p>データベースを以前のバージョンからバージョン5.20～9.31に移行する方法の詳細については、Asset Managerバージョン5.20～9.31に付属している『マイグレーション』ガイドを参照してください。</p> <p>データベースを5.20～9.31から9.60に移行する方法の詳細に</p>

Asset Managerバージョン番号別のアップグレードタイプ (続き)

アップグレードするバージョンの番号	実施する作業	参考ドキュメント
	バージョン9.60にアップグレードします。前の例では、Asset Managerプログラムをバージョン5.20からバージョン9.60にアップグレードします。 4. データベースを9.60フォーマットに移行します。前の例では、データベースフォーマットをバージョン5.20からバージョン9.60に移行します。	については、Asset Managerのこのバージョン (9.60) に付属している『マイグレーション』ガイドを参照してください。
バージョン5.2.xまたはそれ以降	1. Asset Managerプログラム (バイナリファイルと設定ファイル) をバージョン9.60にアップグレードします。 2. データベースを9.60フォーマットに移行します。	Asset Managerプログラムのアップグレード方法の詳細については、この章の「 Asset Managerプログラムをアップグレードする 」(19ページ)のセクションを参照してください。 データベースを5.20以降のバージョンから9.60に移行する方法の詳細については、Asset Managerのこのバージョン (9.60) に付属している『マイグレーション』ガイドを参照してください。

Asset Managerのアップグレード - 概要

アップグレード手順の構成

次のアップグレードが必要です。

- Asset Managerプログラムをバージョン9.60に。
- 旧フォーマットの本番データベースから9.60フォーマットのデータベースに (構造と内容)。データベースをバージョン9.60に移行する方法の詳細については、Asset Manager (9.60) に付属している『マイグレーション』ガイドを参照してください。

注: アップグレードのバージョン増分がマイナーマイナーレベル (9.60から9.60 Patch 1など) である

場合、データベース構造の変更はないため、Asset Managerデータベースを移行する必要はありません。

必須要素

アップグレード手順は比較的簡単であり、次のことが必要です。

- Asset Managerの知識 (インストール、管理)
- 準備
- 技術的能力: データベース管理
- メソッド

設定ファイルをバックアップする

Asset Managerプログラムをアップグレードする前に、次の設定ファイルを必要に応じてバックアップすることをお勧めします。

- <AMインストールディレクトリ>\amsrv\bin\amsrvcf.ini
- <AMインストールディレクトリ>\websvc\package.properties
- <AMインストールディレクトリ>\websvc\quicksearch.properties
- <AMインストールディレクトリ>\webtier\package.properties

Asset Managerプログラムをアップグレードすると、これらの設定ファイル内のカスタマイズ情報が標準のプロパティによって上書きされます。このため、アップグレード後に再度変更内容を手動で適用する必要があります。

Asset Managerプログラムをアップグレードする

管理用コンピュータとクライアントコンピュータで、Asset Managerプログラムをアップグレードする必要があります。

Asset Managerとともに使用する任意のプログラムのバージョンが、Asset Manager 9.60と互換性があるかどうかを確認します。必要に応じて、これらのプログラムのアップグレードを実行します。

Asset Managerプログラムのリストと、Asset Managerとともに使用するプログラムのリストについては、「[Asset Managerのコンポーネント](#)」を参照してください。

Asset Manager 9.60と互換性のあるプログラムのバージョンを確認するには、HPEのカスタマサポートのサイトを参照してください。

ヒント: 互換性の詳細については、「[Windowsでの設定 \(Asset Manager Webを除く\)](#)」の章を参照してください。

このセクションでは、Asset Managerデータベースの移行方法については説明しません。データベースをバージョン9.60に移行する方法の詳細については、Asset Manager (9.60) に付属している『マイグレーション』ガイドを参照してください。

注: アップグレードのバージョン増分がマイナーマイナーレベル(9.60から9.60 Patch 1など)である場合、データベース構造の変更はないため、Asset Managerデータベースを移行する必要はありません。

アップグレード手順

プログラムをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. Asset Manager 9.60をインストールします。

インストール手順に関する情報(注意事項、方法、Asset Managerインストールの各種方法)については、このガイドの他の章を参照してください。

注: Asset Managerを9.60より前のバージョンからアップグレードしている場合、アップグレードされたApplication Designerは、amdb.iniファイルのパスが変更されているため、既存の接続を自動的に読み込めません。amdb.iniファイルを<Documents and Settings>\All Users\Application Data\HP\AssetManager\confから<Documents and Settings>\All Users\Application Data\HPE\AssetManager\confに手動でコピーする必要があります。

2. Asset Managerの旧バージョンをアンインストールします。

ヒント: Asset Manager 9.60を変換マシンにインストールする場合、前のバージョンのAsset Managerを当面の間必ず保存してください。

アンインストールの手順(Asset Managerを削除するための保護対策、手順と方法)については、削除対象のAsset Managerバージョンの『インストールとアップグレード』ガイドを参照してください。

Asset Managerが正常に起動することを確認する

Asset Manager 9.60の起動時に問題が発生した場合は、ユーザサポートに連絡してください。

Asset Manager Webをアップグレードする

Asset Managerプログラムをアップグレードすると、Asset ManagerのWebアーカイブファイル(.warファイル)もアップグレードされます。次に、Asset ManagerのWebサービスとWeb Tierを再展開する必要があります。これには、次の手順に従います。

1. Asset Managerプログラムをアップグレードすると、次の設定ファイル内のカスタマイズ情報が標準のプロパティによって上書きされます。このため、アップグレード後に再度変更内容を手動で適用する必要があります。
 - <AMインストールディレクトリ>\websvc\package.properties
 - <AMインストールディレクトリ>\websvc\quicksearch.properties
 - <AMインストールディレクトリ>\webtier\package.properties
2. Asset Manager Webのアンインストール詳細については「[Asset Manager Webのアンインストール](#)」(109ページ)を参照してください。
3. Asset Manager Webのインストール詳細については「[Asset Manager Webのインストール](#)」(56ページ)を参照してください。

Asset Managerデータベースにアクセスする外部プログラムをアップグレードする

HPE Connect-Itシナリオ

HPE Connect-Itを使って9.60フォーマットの本番データベースのコピーにアクセスするには、Asset Manager 9.60付属のHPE Connect-Itのバージョンを使用する必要があります。

HPE Connect-Itの既製シナリオを使用していた場合、移行後は新規の既製シナリオを使用します。

独自のシナリオを作成した場合:

1. 既製シナリオ以外の旧シナリオを保存します。
2. HPE Connect-Itをアップグレードします。
3. HPE Connect-Itでシナリオを1つずつ開きます。
4. 各シナリオで、以下の操作を行います。
 - a. HPE Connect-Itシナリオを開く際に警告メッセージが表示される場合は、メッセージを確認します。
 - b. 警告メッセージに応じてシナリオを訂正します。
 - c. テスト用データを使ってシナリオを実行します。
 - d. テスト中に問題が発生する場合は、問題点を訂正します。

その他の外部プログラム

その他の外部プログラムをアップグレードするには、それらのプログラムのドキュメントを参照してください。

第5章: Windowsでのインストールとアンインストール (Asset Manager Webを除く)

Asset Managerインストール前の注意事項	24
Oracleクライアント層のインストール	24
SAP Crystal Reportsのインストールの有無	24
Windowsへのインストール	24
クライアント/サーバ型インストール	25
クライアントコンピュータへ迅速にインストールする	25
複数言語でのAsset Managerのインストール	26
Asset Managerを64ビットWindowsシステムにインストールする	26
手動インストール(GUI)	26
手動アンインストール(GUI)	28
Asset Managerアンインストール前の注意事項	28
Asset Managerをアンインストールする	29
自動インストールとアンインストール(コマンドライン)	30
概要	30
準備	31
実行	33

この章ではAsset Managerを初めてインストールする方法を説明します。

Asset Managerインストール前の注意事項

Oracleクライアント層のインストール

Oracleクライアント層 (SQL*NetまたはNet 8) を不適切にインストールすると、アクセント記号のついた文字がAsset Managerでは適切に処理されない可能性があります。この問題は、たとえばアクセント記号付きの文字を含むレコードの挿入時に発生します。このレコードを再選択すると、テキストは正常に表示されません。この問題を解決するには、SQL*NetまたはNet 8の設定を確認してください。

SAP Crystal Reportsのインストールの有無

Asset Managerのインストールを実行する前に、SAP Crystal Reportsランタイムをインストールする必要があるかどうかを決定します。

Crystal Reports Serverがインストール済で、ランタイムバージョンが12である場合、SAP Crystal Reportsランタイムを再度インストールする必要はありません。

注: SAP Crystal Reportsランタイムのインストールは、Asset Managerのインストールプログラムとともに実行されます。

Windowsへのインストール

ソフトウェアをインストールするマシン上にWindows管理者権限が必要です。管理者権限でログインしないと、インストールプログラムはレジストリを変更できません。インストール時に次の手順を使用して「.exe」ファイルを実行することを強くお勧めします。

1. .exeファイルを見つけます。
2. 「.exe」ファイルを右クリックし、[管理者として実行]を選択します。

クライアント/サーバ型 インストール

1. DBMSをサーバとクライアントコンピュータにインストールします。
2. クライアントとサーバ間の通信をテストします。
3. 各クライアントコンピュータにAsset Managerをインストールします。

クライアントコンピュータへ迅速にインストールする

「`amdb.ini`」ファイルには、[ファイル/接続の管理]メニューにある接続のリストが含まれています。

このファイルの場所: 「`.ini`」および「`.cfg`」ファイル

これらのオプションを各クライアントコンピュータのGUIで定義する代わりに、一台のマシンでオプションを定義した後「`amdb.ini`」ファイルを各クライアントコンピュータにコピーします。

ヒント: Asset Managerの完全インストール(セットアッププログラムで**Typical**と呼ばれる)を実行すると、時間が相当かかる場合があります。これは、インストールとその後のアンインストールおよび更新にも当てはまります。

多くの場合、全プログラム機能のインストールが必要になるわけではありません。これは、通常のAsset Managerクライアントをインストールする場合に特に当てはまります。

その場合は、セットアップ画面の最初のページで、**Custom**を選択して、[次へ]をクリックします。

次の画面で、通常省略する機能を以下に示します。

- Asset Manager Automated Process Manager
- データベース管理 (Asset Manager Application Designerおよびデータベースマイグレーションを含む)
- デモ用データベース
- バーコードリーダー
- WebサービスとWebクライアント

複数言語でのAsset Managerのインストール

Asset Manager Windowsクライアントは、同一のコンピュータに複数の言語でインストールすることができます。これを行う場合は、言語バージョンごとに別々のフォルダにインストールする必要があります。

デフォルトでは、インストールバージョンは言語バージョンに関わらず同一のインストールフォルダを使用します。

Asset Managerを64ビット Windowsシステムにインストールする

Asset Manager Windowsクライアントを64ビットのWindowsシステムにインストールする場合:

- ODBCデータソースは、[コントロールパネル/管理ツール/データソース (ODBC)] で作成しないでください。ODBCのこのインスタンスは64ビットであり、Asset Managerでは動作しません。ODBCデータソースの作成には、Asset Managerを使用してください。その処理は、[接続の管理] ウィンドウ(ファイル/接続の管理)の[データソース] フィールドの隣にある  ボタンを使用して実行できます。
- Asset Manager Windowsクライアント上にMicrosoft SQLデータベースへの接続を作成する場合は、[接続の管理] ウィンドウの[システム接続] ボックスが選択されていないことを確認してください。

手動インストール (GUI)

1. インストールメディアを開きます。
2. インストールメディアを開いてもインストールプログラムのウィンドウが自動的に表示されない場合は、次の手順に従います。
 - a. Windowsエクスプローラを実行します。
 - b. インストールメディアのルートディレクトリに移動します。
 - c. acフォルダ内のSetup.exeファイルを右クリックし、[管理者として実行] をクリックします。

3. インストールプログラムの指示に従います。

ヒント: Asset Managerの完全インストール(セットアッププログラムで**Complete**と呼ばれる)を実行すると、時間が相当かかる場合があります。これは、インストールとその後のアンインストールおよび更新にも当てはまります。

多くの場合、全プログラム機能のインストールが必要になるわけではありません。これは、通常のAsset Managerクライアントをインストールする場合に特に当てはまります。

その場合は、セットアップ画面の最初のページで、**Custom**を選択して、**[次へ]**をクリックします。

次の画面で、通常省略する機能を以下に示します。

- Asset Manager Automated Process Manager
- データベース管理 (Asset Manager Application Designerおよびデータベースマイグレーションを含む)
- デモ用 データベース
- バーコードリーダー
- WebサービスとWebクライアント
- UsageHub

Asset Managerの初めてのインストールが完了したら、再度インストーラを実行して、これらの機能をAsset Managerインスタンスにインストールできます。ただし、例外として、Asset Managerの初めてのインストールで**UsageHub**のインストールを選択せずに、インストーラを再実行して、**UsageHub**を有効にしようとした場合、それはインストールされません。

デフォルトでは、**UsageHub**機能がインストールされないことに注意してください。このため、**UsageHub**をインストールする場合、**[カスタム]** インストールモードを選択して、**[UsageHub]** が選択されていることを確認する必要があります。

Asset Managerのインストール時に**[フル版 デモ]** オプションを選択すると、Web Tierを含むすべてのAsset Managerコンポーネントがインストールおよび導入されます。さらに、実行可能なデモ環境の導入作業を円滑に進めるために、埋め込みのMSSQL LocalDB、Tomcat、Windowsサービスもインストールおよび作成されます。**[フル版 デモ]** オプションを選択する場合、Program Files (x86)フォルダに32ビットのJREがインストールされていることを確認する必要があります。

注: これらすべてのサードパーティソフトウェアはフリーウェアですが、これらを本番環境で直接使用することはお勧めしません。

Asset ManagerをWindows 8またはWindows Server 2012にインストールする場合、以下のファイルを手動で削除する必要があります。

```
C:\Users\<ログインユーザ>\AppData\Local\VirtualStore\ProgramData\HPE\AssetManager\conf\amdb.ini
```

注意: インストール時に、次の種類のポップアップウィンドウが数回表示されます。



これは正常な動作です。

[キャンセル] をクリックしないでください。

キーボードの [Enter] を押しただけで [キャンセル] ボタンが選択されるので、インストールの実行中には他のアプリケーションを操作しないことをお勧めします。ポップアップウィンドウが表示されたことに気付かずに [Enter] を押してしまう可能性があります。

注: 前のインストールが失敗した場合、AMインストールフォルダを削除し、コンピュータを再起動してから、Asset Managerを再インストールすることをお勧めします。

手動アンインストール (GUI)

Asset Managerアンインストール前の注意事項

デモ用データベースをインストールした場合

デモ用データベースは、アンインストール時に削除されます。

デモ用データベースを残しておきたい場合は、コピーを作成しておく必要があります。

デモ用データベースのコピーを作成する方法については、デモ用データベースに対して使用するDBMSの付属ドキュメントを参照してください。

注: 場合によっては、SQL Serverなどのサービスを一時的に停止する必要があります。これらのサービスは、データベースにアクセスするので、ファイルをロックしてファイルの削除を妨げる可能性があります。

Webクライアントをインストールした場合

Asset Managerをアンインストールする前に、アンインストールの対象となるファイルをアンロックするために、Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceが使用しているアプリケーションサーバを停止する必要があります。

また、たとえばTomcatサブディレクトリにAsset Manager Web展開の一部として手動でコピーしたAsset Managerファイルを手動で削除する必要があります。これにより、Asset Managerを再インストールまたはアップグレードするときにファイルの非互換性を回避できます。[Asset Manager Webのアンインストール](#)を参照してください。

Asset Managerをアンインストールする

Asset Managerをマシンから完全に削除するには、Windowsコントロールパネルの[プログラムの追加と削除]を使用します。

注意: アンインストール時に、次のようなポップアップウィンドウが数回表示されます。



これは正常な動作です。

[キャンセル]をクリックしないでください。

キーボードの[Enter]を押しただけで[キャンセル]ボタンが選択されるので、アンインストールの実行中には他のアプリケーションを操作しないことをお勧めします。ポップアップウィンドウが表示されたことに気付かずに[Enter]を押してしまう可能性があります。

アンインストールプログラムは通常、以下の操作を実行します。

- インストールされた全ファイルとプログラムグループを削除します。
- Asset Managerのインストールプログラムが加えた変更事項を、設定ファイルから削除します。
- レジストリを更新します。

注: 場合によっては、ファイルロックなどの理由で自動アンインストーラが失敗し、特定のファイルまたはフォルダが削除されます。アンインストール後に、次のフォルダの有無を確認して、必要であれば手動でフォルダを削除します。

- Asset Managerのインスタンス。たとえば、**C:\Program Files\HPE**に存在します。
- [スタート]メニューのAsset Managerプログラムグループおよびショートカット。例: **C:\Documents and Settings\All Users\Start Menu\Programs\HPE**

自動インストールとアンインストール (コマンドライン)

このセクションでは、次のポイントを説明します。

- [概要](#)
- [準備](#)
- [実行](#)

概要

コマンドラインのインストールを使用すると、複数のコンピュータに対してAsset Managerのインストールを標準化および自動化することができます。

コマンドラインからインストールを実行するためには、特定のパラメータを定義する必要があります。

Asset Managerインストールパラメータは、「.msi」ファイル内で定義されます。

Asset Managerインストールメディア上でデフォルトで提供されるファイルは、「**AssetManager.msi**」という名前です。

「.msi」ファイルの変更は、**Orca**という名前のMicrosoftのプログラムによって実行されます。

Orcaは、設定を実行するために使用するコンピュータにインストールする必要があります。

準備

Orcaをインストールする

Orcaをインストールするには:

1. Webブラウザを起動します。
2. 次のURLを表示します。
[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/windows/desktop/aa370557\(v=vs.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/windows/desktop/aa370557(v=vs.85).aspx) (英語 サイト)
3. 指示に従います。

Orcaの使用に関するヘルプの取得

Orcaのドキュメントを表示するには:

1. Webブラウザを起動します。
2. 次のURLを表示します。
<http://support.microsoft.com/kb/255905/>

「.msi」ファイルとsetup.exeおよびmsiexec.exeパラメータに関するヘルプを取得する

これらのファイルに関するドキュメントを表示するためには、Microsoft Platform SDKオンラインヘルプを参照してください。

このオンラインヘルプは、Windowsの [スタート / プログラム / Microsoft Platform SDK XXX / Platform SDK Documentation] メニューで表示できます。

Asset Managerインストールを設定する

Asset Managerインストールを設定するとは、「AssetManager.msi」ファイルをOrcaで変更することです。

注意: 「AssetManager.msi」ファイルの変更はできますが、名前は変更できません。

ここでは、「.msi」ファイルの特定パラメータについてのみ説明します。

その他すべてのパラメータについては、「.msi」ファイルのヘルプを参照してください。

1. Windows Explorerを起動します。
2. Asset Managerインストール元フォルダ (インストールメディア、「am」フォルダ) の内容をハードドライブ (たとえばC:\Templam) にコピーします。
3. Orcaを起動します。
4. 「AssetManager.msi」ファイルを開きます ([ファイル/開く])。これは、インストールメディアの内容をコピーしたフォルダにあります。
5. インストールするコンポーネントを設定します。
 - a. [Tables] 列で「Feature」を選択します。
インストールの可能性があるコンポーネントのリストがOrcaによって表示されます。
[Title] 列では、コンポーネントを特定することができます。
[Level] 列では、コンポーネントのインストール方法を管理することができます。
 - b. 次に示すように、コンポーネントごとに[Level] 列を入力します。

[Level] 列の値	コマンドラインからのインストール動作	「Typical」のGUIインストール動作	「Custom」のGUIインストール動作
0	インストールされない	インストールされない	使用不可能
1	インストールされる	インストールされる	使用可能でデフォルトで選択される
200	インストールされない	インストールされない	使用可能だがデフォルトで選択されない

6. Windowsの[スタート]メニュー用に作られるプログラムグループを設定します。
たとえばデフォルトでは、Asset Managerは[スタート/プログラム/HPE/AssetManager 9.60 <言語>/Client]にインストールされます。
パスを変更するには:
 - a. [Tables] 列で「Shortcut」を選択します。
1行ごとにプログラムグループの各項目が表示されます。
[Name] 列では、項目を特定することができます。
[Directory] 列では、項目を作成するプログラムグループを表しています。
それは、プログラムグループのパスを保存する[Directory] テーブルのあるレコードの識別子です。

- b. 変更するプログラムグループの識別子を記録しておきます。
例: Asset Managerクライアントは、[Name] 列の値「HPE|HPE Software Asset Manager」によって識別されます。[Directory] 列の値は「newfolder2」です。この値を記録しておきます。
- c. [Directory] テーブル内でこれらの識別子をそれぞれ検索します。
- d. [Tables] 列で [Directory] を選択します。
- e. [Directory] 列のヘッダーをクリックしてソートします。
- f. 変更するプログラムグループごとに、[Directory] 列でその識別子を選択し、[DefaultDir] 列の値を変更します。
この例では、「newfolder2」を検索します。

注意: ソートは大文字と小文字を区別します。そのため、「newfolder2」はリストの最後にあります。

7. 設定を保存します ([File / Save] メニュー)。
8. 終了します ([File / Close] メニュー)。

実行

概要

インストールを開始するには、コマンドラインウィンドウを開き、**setup.exe**を実行します。次の管理者権限を使用してコマンドラインウィンドウを開くことを強くお勧めします。

1. **cmd.exe**を右クリックします。
2. [管理者として実行] を選択します。

「**setup.exe**」で使用可能なパラメータは、次のコマンドで表示できます。

```
setup.exe /?
```

パラメータにより初期化ダイアログボックスを非表示にする例を示します。

```
setup.exe /S
```

1. 「**setup.exe**」は、Windowsがデフォルトでインストールする「**MsiExec.exe**」プログラムをインストールまたは更新します。

2. 「**setup.exe**」は、Orcaを使ってカスタマイズした「**AssetManager.msi**」ファイルの設定でインストールを行う「**MsiExec.exe**」プログラムを始動します。

「**MsiExec.exe**」で使用可能なパラメータは、次のコマンドで表示できます。

```
MsiExec.exe /?
```

注意: このオプションは、**MsiExec**バージョン3以降でのみ使用できます。

これより前のバージョンの場合、「**MsiExec.exe**」のバージョンに対応したドキュメントを参照してください。

GUIを使わない無人インストールを可能にするパラメータの実行例を次に示します。

```
MsiExec.exe /qn
```

パラメータを「**setup.exe**」によって「**MsiExec.exe**」に送信するには、パラメータの先頭に以下の文字を付ける必要があります。

```
/V
```

無人インストールを可能にするパラメータの実行例は次のとおりです。

```
setup.exe /V/qn
```

注意: *V*の後にコマンドを続ける場合は、必ずスペースなしで*V*に続ける必要があります。

コマンドラインからインストールを実行する

コマンドラインからAsset Managerをインストールするためには、さまざまな方法があります。

このセクションでは次の特徴を持つインストールの例を示します。

- ダイアログボックスを開かずに「**setup.exe**」を実行する。
- ユーザ入力、GUIなしで、「**msiexec.exe**」を実行する。
- インストールプログラムによるメッセージを「**C:\Temp\log.txt**」ファイルに保存する。
- Asset Managerをフォルダ「**C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx**」にインストールする。

1. DOSコマンドプロンプトを開きます。

注: 次の手順を使用してコマンドプロンプトを開くことを強くお勧めします。

- a. 「**cmd.exe**」ファイルを見つけます。
 - b. 「**cmd.exe**」ファイルを右クリックし、[管理者として実行]を選択します。
2. 「**setup.exe**」プログラムファイルとカスタマイズ可能な「**AssetManager.msi**」ファイルがあるAsset Managerインストール元フォルダに移動します。
 3. 次のコマンドを実行します。

```
setup.exe /S /V"/qn /I* C:\Temp\log.txt INSTALLDIR="C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\""
```

解説:

- **setup.exe**: 「**msiexec.exe**」のローカルバージョンをテストして必要な場合は更新するために、「**setup.exe**」によってインストールを始動します。
 - 注: Asset Managerのインストールでは、バージョン2以上が必要です。
 - **/S**: 「**setup.exe**」を初期化ダイアログボックスなしで実行します。
 - **/V**: 後に続くパラメータが「**msiexec.exe**」に送られます。
/Vの後のコマンドは、全体をダブルクォーテーションマークで囲みます。
 - **/qn**: 「**msiexec.exe**」をユーザ入力またはGUIなしで実行します。
 - **/I* C:\Temp\log.txt**: インストールプログラムの大部分のメッセージを「**C:\Temp\log.txt**」ファイルに保存します。
 - **INSTALLDIR="C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\"**: Asset Managerを「**C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx**」フォルダにインストールします。
パスの中の**Program**と**Files**の間にスペースを入れるために、「****」を使用していることに注意してください。
4. 注: 上記のコマンドラインを実行すると、ただちにコマンドプロンプトが表示されます。インストールが完了しても通知はされません。

ログファイル(上記の例では**C:\Temp\log.txt**)の最後の行に「**Installation complete**」と書かれてあれば、インストールは完了しています。

コマンドラインからアンインストールを実行する

コマンドラインからAsset Managerをアンインストールするためには、さまざまな方法があります。

次の例をお勧めします。

1. Asset Managerアンインストールに相当するレジストリキー番号を特定します。
 - a. レジストリエディタ「**regedit.exe**」を起動します (Windowsの [スタート/ファイル名を指定して実行] メニュー)。
 - b. 「**HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Uninstall**」を展開します。
 - c. Asset Managerに対応するキーを検索します。中括弧で囲まれたキーの詳細を表示し (左側のパネル)、**[DisplayName]** フィールドの値を確認します (右側のパネル)。このフィールドには名前前 Asset Managerとそのバージョンが含まれます。
 - d. このキーを選択します。
 - e. キーの名前をコピーします (**[キー名のコピー]** ショートカットメニュー)。対象となる部分は、次に示すように中括弧の間にあります。例:

```
{A79E51C8-4E8E-40CE-A56E-143395D011C1}
```

- f. レジストリエディタを終了します。
2. DOSコマンドプロンプトを開きます。
3. 次の形式でコマンドを実行します。

```
msiexec.exe /x <レジストリキー> /qn /!* <ログファイルの完全パス>
```

例:

```
msiexec.exe /x {A79E51C8-4E8E-40CE-A56E-143395D011C1} /qn /!* C:\Temp\log.txt
```

解説:

- **コマンドラインからインストールを実行する**
- **/x:「msiexec.exe」**によりアンインストールを実行します。

注: コマンドラインからアンインストールを実行する場合、一部のみをアンインストールすることはできません。

4. **注:** 上記のコマンドラインを実行すると、ただちにコマンドプロンプトが表示されます。アンインストール完了の通知はありません。

ログファイル (上記の例では **C:\Temp\log.txt**) の最後の行に **Uninstallation completed successfully** のテキストがあれば、アンインストールは完了しています。

第6章: Windowsでの設定 (Asset Manager Webを除く)

Oracle DLL	37
メッセージシステム	38
Asset Manager Automated Process Manager	39
SAP Crystal Reports	41
一連のコンピュータへのソフトウェアの配布	41
HPE Connect-Itとの統合	41
デモ用データベース	42
データベースへの接続	43

Asset Managerプログラムがインストールされたら、インストールを完了するため、さらにいくつかの手順が必要です。これらの手順は使用する、またはAsset Managerと統合するコンポーネントとアプリケーションにより異なります。

この章では、これらの補足操作について説明します。

Oracle DLL

Oracleアクセス用のDLLには複数のバージョンがあります。Asset Managerはサポートされているバージョンを動的に読み込みようとします。まずバージョン番号の高いDLLからはじめ、サポートされている古いバージョンへと移行します。

1. **oraclient12.dll**
2. **oraclient11.dll**

ただし、「am.ini」ファイルに以下のような項目を追加すれば、この順序を変更して特定のDLLファイルを読み込むこともできます。

```
[DLL]
orcl = <xxx>.dll
```

このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル

メッセージシステム

Windows上でサポートしているメッセージシステムの標準規格

- VIM
- Extended MAPI
- SMTP

注: Simple MAPIはサポートされていません。

外部メッセージシステムのインストール

Asset Managerで外部メッセージシステムを正常に機能させるには、次の条件が必要です。

メッセージシステムの標準規格	必要な条件
VIM	システムのPATH環境変数に、「vim32.dll」ファイルが入っているフォルダのパスが指定されている必要があります。 例: Lotus NotesのDLLファイルは一般にNotesによりNotesと同じフォルダにインストールされます。PATHは通っていません。
SMTP	TCP/IPレイヤを必ずインストールします。 SMTPメッセージシステムを正しくインストールした場合には注意します。

Asset Managerから外部メッセージシステムにメッセージを送信するための設定

メッセージシステムの機能を最大限に利用するには、次の作業を行う必要があります。

必要な作業	参考ドキュメント
管理者およびユーザのメッセージ用アドレスを指定する。	『管理』ガイドの「メッセージシステム」の章、「Asset Managerでメッセージシステムを指定する」のセクション
調達、テクニカルサポート、アラームなどで使う「メッセージ」タイプのアクションを作成する。	『高度な使い方』ガイドの「アクション」の章、「アクションの作成」のセクション、「[メッセージ] タブページに入力する」
調達、テクニカルサポート、アラームなどにリンクされているメッセージを送信するように、Asset Manager Automated Process Managerを設定する。	『管理』ガイドの「Asset Manager Automated Process Manager」の章
Asset Manager Automated Process Managerを実行する。	『管理』ガイドの「Asset Manager Automated Process Manager」の章

必要な作業	参考ドキュメント
トラブルシューティング	『管理』ガイドの「メッセージシステム」の章、 「一般的な接続エラー」のセクション

メッセージシステムの使用については、『管理』ガイドの「メッセージシステム」の章で詳細を説明しています。

Asset Manager Automated Process Manager

Asset Manager Automated Process ManagerはAsset Managerクライアントから独立したプログラムです。調達、在庫、履歴、またはリースのドメインでトリガされるアラーム、メッセージやアクションをモニタしたり、特定のフィールドの値を計算したりします。

これらの処理が正しく行われるために、ユーザはまず、少なくとも1台のコンピュータ上でAsset Manager Automated Process Managerを常時稼働してから、本番データベースに接続する必要があります。

WindowsクライアントやWebクライアントがデータベースに接続するには、以下に挙げるアクションが必要です。

- Asset Manager Automated Process Managerが実行中で、データベースに接続している必要があります。
- Asset Manager Automated Process Managerデータベースサーバに信号送信 (UpdateToken) モジュールがアクティブであり、少なくとも1週間に1回実行されるようにスケジュールされている必要があります。

Asset Manager Automated Process Managerの詳細については、Asset Manager『管理』ガイドの「**Asset Manager Automated Process Manager**」の章を参照してください。

Asset Manager Automated Process ManagerのモジュールはHPE Connect-Itとそのコネクタを使用し、以下のようなデータの自動インポートを実行します。

- HPE Discovery and Dependency Mapping Inventory棚卸アプリケーションによって実行される棚卸
- 外部アプリケーションからのデータのインポート

このようなモジュールを使用する場合はHPE Connect-Itをインストールします。

HPE Connect-Itの動作環境、およびインストール方法についてはHPE Connect-Itのドキュメントを参照してください。

HPE Connect-ItとAsset Manager Automated Process Managerの統合方法については、Asset Manager『**管理**』ガイドの「**Asset Manager Automated Process Manager**」の章、「**Asset Manager Automated Process Managerでモニタするモジュールを設定する**」セクションを参照してください。

WindowsでAsset Manager Automated Process Managerを導入する

このプログラムを使用できるようにするには、サポートされているバージョンのWindowsを少なくとも1台のコンピュータにインストールする必要があります。

Asset Manager Automated Process Managerは、以下のいずれかの方法で起動できるようにインストールされます。

- Windowsの[スタート]メニューのショートカットから手動で起動
- サービスとして自動的に起動

ヒント: Asset Manager Automated Process Managerは、サービスとして起動することをお勧めします。

注: Asset Manager Automated Process Managerサービスを適切にインストールするには、以下の手順に従ってください。

1. Windowsでユーザーアカウントを作成します (このサービスをインストールする予定のコンピュータで)。このアカウントには、Asset Manager Automated Process Managerサービスの起動に必要な権限がなければなりません。このアカウントにリンクする環境で、Asset Manager Automated Process ManagerサービスがインストールされているコンピュータにインストールされたDBMSのクライアント層の使用が許可されている必要があります。ローカルシステムアカウントは、デフォルトではシステムの環境変数にしかアクセスしません。
2. Asset Manager Automated Process Managerサービスをこのアカウントでインストールします。

デフォルトでは、このプログラムのサービスが自動的に起動するように設定されていますが、これは変更可能です。

コントロールパネルの[サービス]を使うと、コンピュータで使用可能なWindowsサービスを開始、停止、設定できます。

- Windowsのバージョンに応じて、以下のように動作します。
 -  ボタン: 停止しているサービスを開始します。
 -  ボタン: サービスを停止します。

-  ボタン: サービスを再起動します。
-  ボタン: サービスを中断します。

Asset Manager Automated Process Managerサービスを、Windowsの自動モードで起動するには:

1. サービスのウィンドウからAsset Manager Automated Process Managerサービスを選択します。
2. 右クリックし、ポップアップメニューで**[プロパティ]**を選択します。
3. **[スタートアップの種類]**フィールドを**[自動]**にします。

注:

- 実際にAsset Manager Automated Process Managerが正常に動作することを確認したら、スタートアップモードを**[自動]**に設定して、Windowsの起動時に自動的に開始させることをお勧めします。
- サービスは、デフォルトでWindowsのシステムアカウントを使用します。Asset Manager Automated Process Managerがデータベースに接続できない場合は、**[スタートアップ]** ボタンをクリックして、データベースにアクセスできるアカウントを使うようにサービスを設定します。

SAP Crystal Reports

Crystal Reportsのインストール、設定と使用については、『**高度な使い方**』ガイドの「**SAP Crystal Reports**」の章を参照してください。

一連のコンピュータへのソフトウェアの配布

一連のコンピュータへソフトウェアを配布する方法については、Asset Managerの『**Software Distribution**』ガイドを参照してください。

HPE Connect-Itとの統合

Asset ManagerにはHPE Connect-It完全版と、ドキュメントが付属しています。

必要なHPE Connect-Itのバージョン

HPE Connect-ItとAsset Managerを統合するには、Asset Managerインストールメディアに提供されているHPE Connect-Itのバージョン、またはそれ以降が必要です。

HPE Connect-Itのユーティリティ

以下のような場合、Asset Manager Automated Process Managerが自動的に起動する一部のアクションの実行に、HPE Connect-Itが必要になります。

- Asset Managerデータベースへの接続時にNTセキュリティを使用するために、データベースにNTユーザーを追加する場合

注意: Asset Manager Automated Process Managerの**Windows**バージョンが必要です。

- データベースにNTドメインで宣言されたコンピュータを取得する場合

注意: Asset Manager Automated Process Managerの**Windows**バージョンが必要です。

- たとえば、棚卸データをHPE Discovery and Dependency Mapping Inventoryからインポートする場合

HPE Connect-Itの動作環境、およびインストール方法についてはHPE Connect-Itのドキュメントを参照してください。

HPE Connect-ItとAsset Manager Automated Process Managerの統合方法については、Asset Manager『管理』ガイドの「**Asset Manager Automated Process Manager**」の章、「**Asset Manager Automated Process Managerでモニタするモジュールを設定する**」セクションを参照してください。

デモ用 データベース

Asset Managerはデモ用データベースとともにインストールされます。

このデータベースには次の機能があります。

- InstantOnライセンスによってアクティブにでき、この場合、ユーザは60日間使用できます。
『管理』ガイドの「**ライセンスキーをインストールする**」の章を参照してください。
- Asset Manager Automated Process ManagerおよびAsset Manager Application Designerによるアクセスも可能です。

デモ用データベースは、「Asset Manager」インストールフォルダの「**demo**」サブフォルダにコピーされています。

該当ファイルは、「**AMDemo96.mdf**」です。

注: インストール時に、ユーザが「**itam**」でパスワードが「**password**」であるインスタンスを使用して、デ

モ用データベースがMicrosoft SQL Serverに宣言されます。

データベースへの接続

1. SQL Serverインスタンスがインストール済みで、対応するWindowsサービスが開始されていることを確認します。
2. Asset Managerを起動します。
3. [データベースに接続] ウィンドウが表示されます。

このウィンドウへ次のように入力します。

フィールド	値
接続	AMDemo96en
ログイン	Admin
パスワード	空

注: 他のログインも使用できます。

第7章: Linuxでのインストールと設定 (Asset Manager Webを除く)

Asset Managerのインストール	44
Asset Manager Automated Process Managerの導入	47
Windowsインタフェースで初めてAsset Manager Automated Process Managerを構成する	48
Asset Manager Automated Process ManagerがAsset Managerデータベースに正常接続することを確認する	50
Webインタフェースを使ったAsset Manager Automated Process Managerの設定を可能にする ..	51
Asset Manager Automated Process ManagerをWebインタフェースで設定する	52
APIを使用してAsset Managerデータベースにアクセスする	52

注: Linux版のプログラムには、ネイティブのグラフィカルインタフェースがありませんが、Asset Manager Automated Process ManagerはWebインタフェースを使用してLinuxで一部を設定することができます。Linuxでインストールする場合、Windowsコンピュータでいくつかのファイルを用意してからコピーしてやる必要があります。少なくとも1台のWindowsコンピュータに以下をインストールおよび設定することが必要です。

- Asset Manager Application Designer
- Asset Manager Automated Process Manager
- Asset Managerクライアント

実行はLinuxサーバ上でコマンドラインから行う場合でも、Asset Manager Application DesignerおよびAsset Manager Automated Process ManagerをGUIで設定することができます。

Asset Managerのインストール

LinuxでAsset Managerをインストールするには:

1. 『管理』ガイドの「**Asset Managerの作成、変更、および削除**」の章に記載されているように、WindowsでAsset Managerデータベースを作成します。

- Asset Managerのインストールと設定に使用するLinuxユーザを作成します。

注意: HPE Connect-Itを同じコンピュータにインストールしている場合は、同じアカウントを使用してAsset Managerをインストールします。

- Asset Managerインストール用CD-ROMにある「.tgz」ファイルを検索します。

- GNU tarを使用して以下のコマンドラインを入力することによって、「.tgz」ファイルを解凍します。

```
tar xzvf <tgzの名前>
```

注: この操作は特別に用意したインストール先フォルダ (たとえば「/usr/local」) 内から実行しなければなりません。

ヒント: 使用しているtarがGNU tarであるかどうかを確認するには、次のコマンドラインを入力します。

```
tar --version
```

これに対して、以下のように返されます。

```
tar (GNU tar) 1.19
```

この確認が得られない場合は、非GNUバージョンのtarを使用しているか、GNUバージョンのtarが別の場所にあることを表しています。

GNUバージョンのtarが使用されていない場合、標準tarによる通知なしで一部のファイル名が切り捨てられます。

- 動的ライブラリ「libaamapi96.so」(「/usr/local/Asset Manager/bin」フォルダ内) のパスは、システムライブラリの検索パスに含まれる必要があります。

- Linuxの場合: 環境変数 LD_LIBRARY_PATH
- Linuxの場合: 「ld.so」の設定ファイルも参照

注意: 「libaamapi96.so」ファイルをAsset Managerインストール先フォルダの「bin」サブフォルダに置いておく必要があります。

たとえば、sh (Shell) 互換のコマンドインタプリタの場合、Asset Managerを起動する前に、以下のコマンドを実行するか、または実行するスクリプト内に以下のコマンドを追加します。

```
LD_LIBRARY_PATH=/usr/local/Asset Manager/bin:$LD_LIBRARY_PATH
export LD_LIBRARY_PATH
```

「ld.so」の設定ファイルは通常「/etc/ld.so.conf」です。設定ファイル「ld.so.conf」に、たとえば以下の行を追加します。

```
/usr/local/Asset Manager/bin
```

新しいパラメータを読み込ませるために「ldconfig --verbose」コマンドを再起動します。

- Asset Managerでは、32ビットと64ビットの両方のDBMSクライアントを使用できます。環境変数 **LD_LIBRARY_PATH**がライブラリの対応するディレクトリをポイントしていることを確認する必要があります。

32ビット Oracleクライアントの場合、環境変数 **LD_LIBRARY_PATH**が**\$ORACLE_HOME/lib32**ディレクトリ(32ビットライブラリ)をポイントしていることを確認します。

64ビット Oracleクライアントの場合は、環境変数 **LD_LIBRARY_PATH**が**\$ORACLE_HOME/lib**ディレクトリ(64ビットライブラリ)をポイントしていることを確認します。

32ビット Oracleレイヤ、および32ビット DB2レイヤを持つクライアントの場合、環境変数は次のようになります。

```
ORACLE_HOME=/space/home/oracle/OraHome1
LD_LIBRARY_
PATH=/space/home/oracle/OraHome1/lib32:/home/db2inst1/sqllib/lib:$LD_LIBRARY_
PATH
```

```
PATH=/space/home/oracle/OraHome1/bin:/home/db2inst1/sqllib/bin:/home/db2inst1/s
qllib/adm:/home/db2inst1/sqllib/misc:$PATH
```

64ビット Oracleレイヤ、および64ビット DB2レイヤを持つクライアントの場合、環境変数は次のようになります。

```
ORACLE_HOME=/space/home/oracle/OraHome1
LD_LIBRARY_PATH=/space/home/oracle/OraHome1/lib:/home/db2inst1/sqllib/lib:$LD_
LIBRARY_PATH
```

```
PATH=/space/home/oracle/OraHome1/bin:/home/db2inst1/sqllib/bin:/home/db2inst1/s
qllib/adm:/home/db2inst1/sqllib/misc:$PATH
```

- DBMSとAsset Managerデータベースへのアクセス権限を持つようにDBMSクライアントを設定します。

注意: Windowsでデータベースを作成したときに使用したのと同じサーバ名、データベース名を使用します。たとえば、Oracleサーバが「**tnsnames.ora**」内で**AssetManagerServer**という名前であれば、クライアントマシン上の「**tnsnames.ora**」ファイルでもこの名前を再び使用します。

- SQLクエリツールを使用して、DBMSとAsset Managerデータベースに接続できることを確認します。

Oracleの例: **sqlplus**

DB2の例: **db2**

ヒント: 問題が発生した場合は、DBMSベンダの技術サポートホットラインに連絡してください。

クライアントの設定におそらく誤りがあります。

9. コンピュータに「**amdb.ini**」ファイルを作成します。

このファイルは、データベース接続の宣言を格納します。

コンピュータからこれらの接続にアクセス出来るようにするには:

- a. Windowsコンピュータ上でAsset Managerをグラフィカルモードで起動します。
- b. [ファイル/接続の管理]メニューを選択します。
- c. 接続を作成します。
- d. ウィンドウを閉じます ([閉じる]をクリックします)。
- e. **AmApiDll**エントリが「**libaamapi96.so**」ファイル(「**/usr/local/Asset Manager/bin**」ディレクトリ)をポイントするように「**amdb.ini**」ファイルを編集します。
- f. 「**amdb.ini**」をコピーし、Asset Managerを起動するコンピュータの「**amdb.ini**」を含むフォルダ内に貼り付けます。このファイルの場所: 「**.ini**」および「**.cfg**」ファイル

特に、以下のコンポーネントがインストールされます。

- **amdbal**、**amimpl**、**amexpl**、**libaamapi96.so** (**/usr/local/Asset Manager/bin**内)
これらのコンポーネントは、Windows上と同じ方法で使用されます。
詳細については、関連するドキュメントを参照してください。
- 「**amsrvl**」(**/usr/local/Asset Manager/amsrv/bin**):
このコンポーネントは、Linux特有の方法で使用されます。
[Asset Manager Automated Process Managerの導入](#)

ヒント: 上記のコンポーネントを-hオプションとともに実行すると、使用可能なオプションの一覧を取得できます。

例: `amimpl -h`

Asset Manager Automated Process Managerの導入

Asset Manager Automated Process Managerのデータベースへの接続は、次のようなLinuxコマンドラインにより起動されます。

```
amsrvl -svc  
-webadmin  
-cnx:<Asset Manager接続の名前>
```

```
-login:<データベースへの接続用ログイン>  
-password:<ログインに関連づけられたパスワード>  
-log:<活動ログファイルの完全パス>  
&
```

説明:

- -svc: NTサービスと同じ方法でプロセスを実行します。
- -webadmin: Asset Manager Automated Process ManagerのWebサーバを起動します。
このオプションの詳細: [Asset Manager Automated Process ManagerをWebインタフェースで設定する](#)
- -cnx、-login、-password: 「[Webインタフェースを使ったAsset Manager Automated Process Managerの設定を可能にする](#)」の指示に従う場合は、これらのオプションを使用してはなりません。
-loginオプションに入力する場合、指定されるログインにはAsset Managerデータベースの管理権限がなければなりません。
- &: プロセスをバックグラウンドで実行する

Windowsインタフェースで初めて Asset Manager Automated Process Managerを構成する

Asset Manager Automated Process Managerの一部の設定は、Webインタフェースでも直接Linuxで行うことができません。このため、まずWindowsでAsset Manager Automated Process Managerを設定し、その後「amsrvcf.ini」と「amsrv.cfg」ファイルをWindowsコンピュータからLinuxコンピュータにコピーする必要があります (このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル)

1. Windowsコンピュータ上でAsset Manager Automated Process Managerをグラフィカルモードで起動します。
2. [ファイル/データベースに接続]メニューを選択します。
3. [この接続をサービスモードで使用]を選択し、接続パラメータを指定します。
4. [開く]をクリックします。
5. [ツール/モジュールの設定]を選択します。
6. 使用するモジュールを設定します。

注意: 次のモジュールはLinuxでは機能しません。

- データベースにNTドメインのコンピュータを追加 (AddCpu)
- データベースにNTユーザを追加 (AddUser)

注: モジュールの設定が「amsrv.cfg」ファイルに保存されます。

このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル

7. Asset Managerデータベースに接続するためのパスワードを設定します。

注: パスワードは、「amsrvcf.ini」ファイルに保存されます。

このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル

このファイルをWindowsで設定する場合、「amsrvcf.ini」ファイルに保存されるパスワードは、次のようにマスクされたままです。

```
Password=8D5D1F3C77FE9FC78DE77FA7676E73CB517186D0B71B124254200200
```

8. [ファイル/データベースの接続解除]メニューを選択します。
9. Asset Manager Automated Process Managerを終了します。
10. 「amsrv.cfg」ファイルを編集し、Linuxでは機能しないモジュール (AddCpu、AddUser) への参照をすべて削除します。

具体的には、これらのモジュールに対応するセクション全体を削除します。

AddUserモジュールの例:

```
{ Module AddUser
  Active=1
  UserData="\\"$connectit_exedir$/conitsvc.exe\" -once -wpplog '$connectit_
  exedir$/../scenario/ntsec/ntac$version$/adduser.scn' -
  dc:AssetCenter.SERVER=$cnx$ -dc:AssetCenter.LOGIN=$login$ -
  dc:AssetCenter.TEXTPASSWORD=$pwd$
  { Plan
    sunday = ENUM/01:00
  }
}
```

このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル

11. HPE Connect-Itを呼び出すモジュールを使用する場合は、「amsrvcf.ini」ファイルを次のように編集します。

[Option] セクション (ない場合は作る必要があります) で、次のような行があることを確認してください。

```
/ExecEvent/ConnectItExeDir=/usr/local/ConnectIt/bin
```

12. Asset Manager Automated Process ManagerをホストするLinuxコンピュータにWindowsコンピュータの次のファイルをコピーします。

- **amsrvcf.ini**
- **amsrv.cfg**

このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル

Asset Manager Automated Process ManagerがAsset Managerデータベースに正常接続することを確認する

このためには次のコマンドを実行します。

```
amsrv1 -cnx:<Asset Manager接続の名前> -login:<データベースへの接続用ログイン> -  
password:<ログインに関連づけられたパスワード>  
-log:<活動ログの完全パス>
```

続いて、活動ログに目を通して接続エラーがないことを確認します。

接続が失敗した場合、インストール手続きのすべてのポイントを確認します。特に、次のことを確認します。

- 実行権限が正しいこと
- ライブラリが正しい場所にあり、読み取り権限が割り当てられていること (read-onlyで十分です)
- DBMSサーバの名前と「**amdb.ini**」ファイルで指定されたAsset Managerデータベースの名前が、DBMSのクライアント層をインストールしたときに宣言した名前に一致すること (よくあるエラー)

このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル

Oracleの例 (「**amdb.ini**」ファイルより):

```
[BaseAssetManagerOracle]  
Engine=Oracle  
Location=TITANIUM // MAKE SURE THAT THIS NAME IS THE NAME DECLARED IN THE DBMS  
CLIENT LAYERS (TNSNAMES.ORA FOR ORACLE)  
Base=AM  
EngineLogin=AM  
  
EnginePassword=37681ED114D187562F4561D6B901D7F686BEC410CB21C2855D22E3EA00A6A1F94  
9C885124254200200
```

```
ReadOnly=0
CacheSize=5120000
AmApiDll=/usr/local/AssetManager/bin/libaamapi96.so // MAKE SURE THIS PATH HAS
BEEN MODIFIED
DB2の例 (「amdb.ini」ファイルより):

[BaseAssetManagerDB2]
Engine=DB/2
Location=MARANELL // MAKE SURE THAT THIS NAME IS THE NAME DECLARED IN THE DBMS
CLIENT LAYERS
Base=AMDB2
EngineLogin=db2admin
EnginePassword=CF188FEB2E1CBEBCE568414D4BB27232D1C43644B4E10CF9124254200200
AmApiDll=/usr/local/AssetManager/bin/libaamapi96.so // MAKE SURE THIS PATH HAS
BEEN MODIFIED
```

データベースに接続することができても一時的でないエラーが残る場合、おそらく「amsrv.cfg」および「amsrvcf.ini」設定ファイルに原因があります。

このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル

必要な場合は、HPEテクニカルサポートへお問い合わせください。その際は、データベースに接続したときのログファイルを提出していただきます。

Webインタフェースを使ったAsset Manager Automated Process Managerの設定を可能にする

管理者は、Webインタフェースを使用してGUIでAsset Manager Automated Process Managerにアクセスできます。

この機能を有効にするには:

1. 「amsrvcf.ini」ファイルを開きます。
このファイルの場所: 「.ini」および「.cfg」ファイル
2. **WebAdmin** パラメータに値「1」を割り当てます。
3. **WebPort** パラメータの値を変更して、有効なポートを指定します。一般的に、デフォルトポートであるポート82権限を与えられず、ポート1024以上が必要とされます。使用するポートについては、システム管理者に確認してください。

Asset Manager Automated Process ManagerをWebインタフェースで設定する

Asset Manager Automated Process ManagerをWeb経由で管理するには (初期設定はWindowsで実施済み)、Asset Manager Automated Process Managerを-webadminオプションで起動するコマンドを実行します。

コマンドラインを実行するには:

1. Asset Manager Automated Process Managerを起動します。
2. Asset Manager Automated Process Managerをデータベースに接続します。
3. Asset Manager Automated Process ManagerへのWebアクセスを有効にします。

Webブラウザがあるワークステーション (URL: `http://<Asset Manager Automated Process Managerのサーバ名>:<amsrvcf.iniで選択したポート>`) から管理者がAsset Manager Automated Process ManagerにGUIでアクセスできます。webadminログイン (デフォルトパスワードは空) を使用してください。

APIを使用してAsset Managerデータベースにアクセスする

API (HPE Connect-Itなど) を使用してAsset Managerデータベースにアクセスする場合は、まずAsset Manager APIがコンピュータで使用できることを確認します。

genassetをパラメータなしで実行します。

このプログラムは、Asset Managerインストール先フォルダの「bin」サブフォルダにあります。

このプログラムはAPIにアクセスを試みます。次のいずれかのメッセージが表示される場合があります。

```
Genasset.exe - Version 1.2
All rights reserved.
Powered by AssetManager APIs Version XXX
Usage: genasset cnx [AdminPwd]
```

Wrong number of arguments

- この場合、APIにアクセスできません。

```
ld.so.1: genasset: fatal: libaamapi96.so: open failed: No such file or directory
```

- この場合、環境設定に問題があります。

問題が発生した場合は、インストール手続きのすべてのポイントを確認します。特に、次の点を確認します。

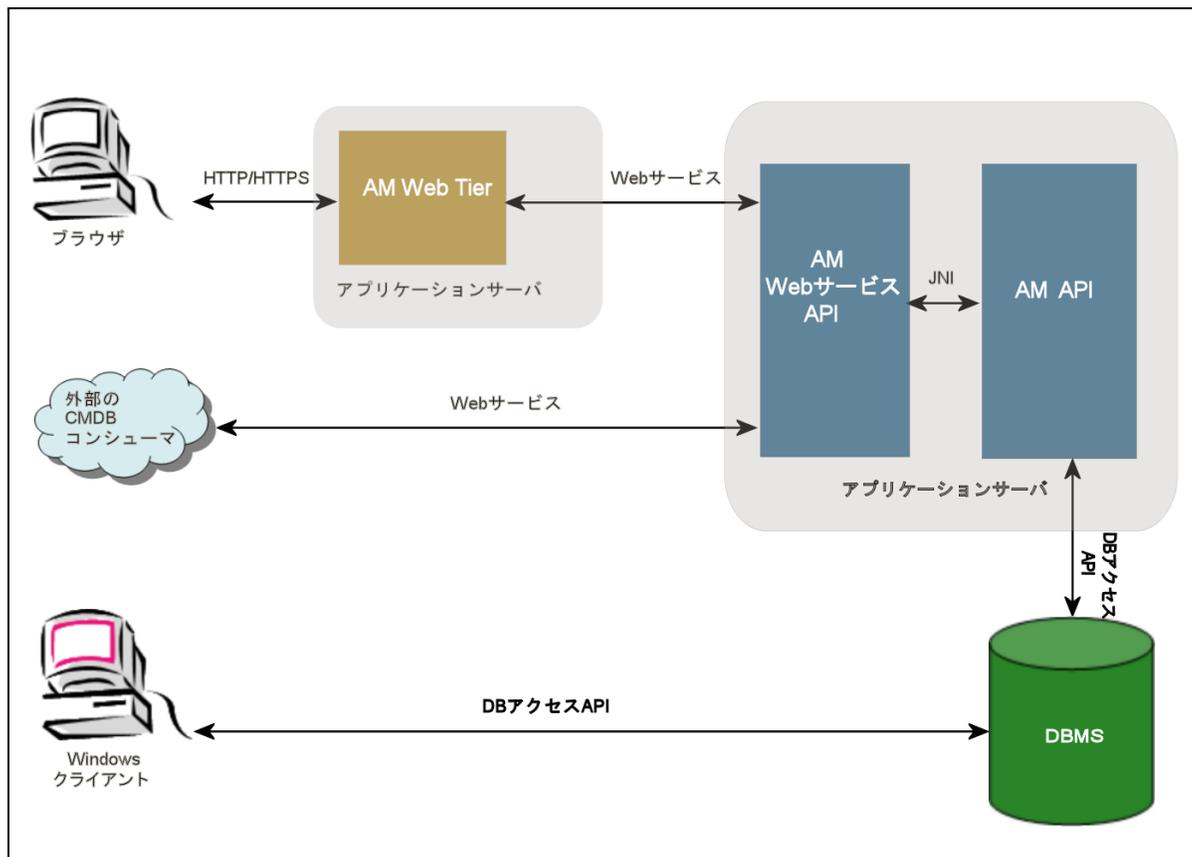
- 実行権限が正しいこと
- ライブラリが正しい場所にあり、読み取り権限が割り当てられていること
- DBMSサーバの名前と「**amdb.ini**」ファイルで指定されたAsset Managerデータベースの名前が、DBMSのクライアント層をインストールしたときに宣言した名前に一致すること(よくあるエラー)
このファイルの場所: 「**.ini**」および「**.cfg**」ファイル

第8章: Asset Manager Webのインストール、設定、および削除

Asset Manager Webアーキテクチャ	55
Asset Manager Webのインストール	56
実用例	56
インストールの概要	60
Asset Manager Webのインストールの準備	61
アーカイブファイルを更新する	68
アーカイブファイルをアプリケーションサーバに展開する	88
展開が成功したかどうかテストする	104
Asset Manager Webの設定	106
Internet Explorerを使ったAsset Managerへのアクセス	106
Asset Manager Webの最適化	106
Tomcatのログファイル	106
Tomcatによって生成されるページの表示にかかる時間	107
ネットワークパフォーマンス	108
Asset Manager Webのアンインストール	109
Apache Tomcatがアプリケーションサーバの場合	109
WebSphereがアプリケーションサーバの場合	109
WebLogicがアプリケーションサーバの場合	110
問題	110
Asset Manager Web	110
Tomcatで実行されるAsset Manager Web Tier	111

Asset Manager Webアーキテクチャ

Asset Manager Webアーキテクチャ



- ユーザが、ブラウザ経由でAsset Manager Webクライアントにアクセスします。
- ブラウザとAsset Manager Web Tierは、HTTP/HTTPSプロトコルを使って通信します。
- Asset Manager Web Tierが、ブラウザから受け取った要求をAsset Manager Web Serviceに送ります。
- Asset Manager Web ServiceがAPIを使ってAsset Managerデータベースを参照または変更します。
- Asset Manager Web ServiceがデータをデータベースからAsset Manager Web Tierに送ります。
- 表示するページをAsset Manager Web Tierがブラウザに送ります。

ヒント: パフォーマンスとスケーラビリティを最適化するための導入時の推奨事項

- Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceは、別々のアプリケーションサーバでホストしてください。
- Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceのインスタンス数は、システムパフォーマンスを改善するために、Asset Manager Web Tierへの接続の増加に合わせて増やすことができます。

Asset Manager Webのインストール

注: Asset Manager Webのインストールは、Asset Manager Webの実行に使用するWebサーバとアプリケーションサーバを正しく設定できる技術を持つユーザが行ってください。

このガイドでは、本書の目的外となるこれらのアプリケーションサーバとWebサーバのインストール方法の説明は行いません。

アプリケーションサーバとWebサーバの使用方法については、使用するサーバに該当するガイドを参照してください。

実用例

注意: このセクションでは、ローカルテストマシン上にインストールされているAsset Manager Webの例を示します。マシンの構成は次のとおりです。

- オペレーティングシステム: x64バージョンのWindows Server 2008 R2
- アプリケーションサーバ: Tomcat 7.0.59
- DBMS: SQL Server 2008 R2
- データベース: Asset Managerとともにインストールされたデモ用データベース

この実用例は、Asset Manager Webのパフォーマンスの最適化を目的としたものではありません。

TomcatとJ2SE JDKバージョンは、現在使用できるか、または本番モードで使用およびサポートする必要があるソフトウェアアプリケーションには必ずしも対応していません。

サポートされているソフトウェアの詳細については、サポート表

(<https://softwaresupport.hpe.com/group/softwaresupport/support-matrices>)を参照してください。

本番環境におけるインストールの詳細: この章の残りのセクション

1. Oracle Webサイトから、J2SE JDKを「**C:\Program Files (x86)\Java\jdk1.7.0_75**」フォルダにインストールします。
2. J2SE JDKインストールフォルダを指すように**JAVA_HOME**システム変数を追加または変更します。このためには、**[コントロールパネル]**を開いて**[システム]** ツールをダブルクリックし、**[システムの詳細設定]** をクリックします。**[詳細設定]** タブで**[環境変数]** をクリックし、**JAVA_HOME**変数を次の値に設定します。

C:\Program Files\Java\jdk1.7.0_75

3. Microsoft SQL Server 2008 R2をインストールします。
4. Asset Managerを「**C:\Program Files (x86)\HPE\Asset Manager 9.60 xx**」フォルダにインストールします。ここで、「**xx**」は、ご使用のAsset Managerの言語を表す2文字の言語コードです。

セットアップタイプは**[カスタム]** モードを選択します。

次のコンポーネントを選択します。

- Asset Manager Automated Process Manager
 - Asset Manager Application Designer
 - データベース管理
 - Asset Manager API
 - デモ用 データベース
 - WebサービスとWebクライアント
5. デモ用 データベースを使用するために、Asset Managerで取得したHP AutoPassライセンスキーをインストールして、Asset Manager Application Designerでデモ用 データベースをアクティブにします。詳細については、Asset Manager『**管理**』ガイドの「**ライセンスキーをインストールする**」の章を参照してください。
 6. Tomcatを「**C:\Tomcat70**」フォルダにインストールします。
次を除き、インストールプログラムがデフォルトで指定したオプションを確定します。
 - **[Run Apache Tomcat when the installation is completed]**
 7. Tomcat設定コンソールを起動します (Windowsでは、**[スタート/プログラム/ Apache Tomcat 7.0 Tomcat 7/ Configure Tomcat]** をクリックします)。
 8. **[Java]** タブをクリックします。
 9. 次のフィールドに値を入力します。

フィールド	値
Java仮想マシン	C:\Program Files (x86)\Java\jre7\bin\client\jvm.dll
Java Classpath	C:\Program Files (x86)\Java\jdk1.7.0_75\lib\tools.jar;C:\Tomcat70\bin\bootstrap.jar
Java Options	以下の行を追加します。 -Djava.library.path=C:\Program Files (x86)\HPE\Asset Manager 9.60 xx\bin -Dsun.lang.ClassLoader.allowArraySyntax=true ここで、「xx」は、ご使用のAsset Managerの言語を表す2文字の言語コードです。
Initial memory pool	512 (またはお使いのコンピュータに適合する別の値)
Maximum memory pool	1024 (またはお使いのコンピュータに適合する別の値)
スレッドスタックサイズ	1000 (またはお使いのコンピュータに適合する別の値。コンピュータの合計RAMよりも最小250Mb小さくなくてはならない)

10. Tomcat設定コンソールを閉じます。
11. DOSコマンドプロンプトを開きます。
12. 「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\deploy」フォルダに変更します。
13. 次のコマンドラインを (別々に) 実行します。


```
deploy.bat /x64 ..\websvc\package.properties
deploy.bat /x64 ..\webtier\package.properties
```
14. 「C:\Program Files (x86)\HPE\Asset Manager 9.60 xx\websvc\AssetManagerWebService.war」および「C:\Program Files (x86)\HPE\Asset Manager 9.60 xx\webtier\AssetManager.war」をコピーします。ここで、「xx」は、ご使用のAsset Managerの言語を表す2文字の言語コードです。それらを「C:\Tomcat70\webapps」フォルダに貼り付けます。
15. Tomcatを起動します。
 - a. Tomcat監視コンソールを起動します (Windowsでは、[スタート/プログラム/ Apache Tomcat 7.0 Tomcat 7/Monitor Tomcat] をクリックします)。
 - b. Windowsタスクバーの右下にある [Tomcat] アイコンを右クリックします。
 - c. [Start service] メニューを選択します。
 - d. 赤い四角マークが緑の右向き三角マークに変わるのを待ちます。

16. Internet Explorerを起動します。
17. 以下のオプションを選択して、Internet Explorerを構成します。
 - JavaScriptを実行する: ([ツール/インターネットオプション] メニューで、[セキュリティ] タブを選択して、[レベルのカスタマイズ] をクリックし、リストの[スクリプト] セクションまでスクロールし、[アクティブスクリプト] オプションに対して[有効にする] を選択します)
 - cookieを受け取る ([ツール/インターネットオプション] メニューで、[プライバシー] タブを選択して、[詳細設定] をクリックし、[自動Cookie処理を上書きする] を選択してから[承諾する] を選択します)
 - ポップアップウィンドウを表示する: ([ツール/ポップアップブロック] メニューで、この項目がオンになっている場合は、[ポップアップブロックを無効にする] メニューを選択します)
18. Internet Explorerを閉じて再起動します。
19. Asset Manager Web Serviceが正しく導入されたかどうかを確認します。
 - a. Internet Explorerを起動します。
 - b. 次のURLを表示します。

```
http://localhost:8080/AssetManagerWebService
```

注意: テキストは大文字と小文字が区別されます。

- c. Asset Manager Web Serviceが起動するまで、ページの再読み込み、または更新を行わないでください。これには数分かかる場合があります。
- d. Asset Manager Web Serviceが正しく導入されると、URLのページに次のようなヘッダーが表示されます。

```
Database
Base:
Name          AMDemo95en
Engine        MSSQL
User          sa
Owner         itam
AmApiDll      'C:\Program Files (x86)\HPE\Asset Manager 9.60 en\bin\amapi95.dll'
[User]: 「Admin」
Version: 9.60 - build xxxx
Dll path: C:\Program Files (x86)\HPE\Asset Manager 9.60 en\bin\amapi95.dll
```

ヒント: ヘッダーの後にエラーが表示された場合は、アプリケーションサーバの[Initial memory pool]と[Maximum memory pool]の設定を再定義してください。

20. 次のURLを表示します。

`http://localhost:8080/AssetManager`

注意: テキストは大文字と小文字が区別されます。

Asset Manager Webのログオンページが表示されます。

21. 次のフィールドに値を入力してログオンします。

フィールド	値
ログイン	Admin
パスワード	パスワードは空欄にしておきます。

インストールの概要

Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceは、以下の同じ手順でインストールします。

- すべての準備タスクを済ませます。
[Asset Manager Webのインストールの準備](#)
- Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを展開するためのアーカイブファイルを更新します。
[アーカイブファイルを更新する](#)
- アーカイブファイルをアプリケーションサーバに展開します。
[アーカイブファイルをアプリケーションサーバに展開する](#)
- 正しく展開できたことをテストします。
[展開が成功したかどうかテストする](#)

注: Asset Manager Web ServiceとAsset Manager Web Tierは、次のようにインストールできます。

- 個別に(テストモード、または本番モード): [WebSphere Application Serverがアプリケーションサーバの場合](#) および [WebLogicがアプリケーションサーバの場合](#)
- 同時に(テストモードのみ): [Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを同時にインストールする](#)

Asset Manager Webのインストールの準備

インストールするコンポーネント

注: サポート表 (<https://softwaresupport.hpe.com/group/softwaresupport/support-matrices>) を参照してください。

- アプリケーションサーバ
- Webサーバ

Asset Manager Webをインストールする前に、下記のコンポーネントをインストール、設定、および起動する必要があります。手順は各コンポーネントのエディタの指示に従ってください。

- データベースサーバ上にAsset Managerデータベース
- Asset Manager Automated Process ManagerがAsset Managerデータベースにアクセス可能な任意のサーバ上のAsset Manager Automated Process Manager

Webクライアントがデータベースに接続するには、以下に挙げるアクションが必要です。

- Asset Manager Automated Process Managerが実行中で、データベースに接続している必要があります。
- Asset Manager Automated Process Managerデータベースサーバに信号送信 (UpdateToken) モジュールがアクティブであり、少なくとも1週間に1回実行されるようにスケジュールされている必要があります。
『管理』ガイドの「**Asset Manager Automated Process Manager**」の章、「**Asset Manager Automated Process Managerでモニタするモジュールを設定する**」のセクションを参照してください。

同じコンピュータに次のアプリケーションをインストールします。

注: 同じ一連のアプリケーションを複数のコンピュータに展開することが必要な場合もあります。それは、たとえばAsset Manager Webのパフォーマンスを強化するためです。

- アプリケーションサーバ
アプリケーションサーバはネットワークインフラストラクチャ (ファイアウォールやプロキシなど) により保護される必要がありますが、インターネットブラウザからの接続は許可する必要があります。
Asset Manager Webのパフォーマンスを最大限に引き出すためには、アプリケーションサーバを正しく設

定する必要があります。

アプリケーションサーバを設定するためのヒントと例については、「[アプリケーションサーバの設定 - 特別な場合と例](#)」を参照してください。

設定情報の詳細については、アプリケーションサーバに付属するドキュメントを参照してください。

- Java Development Kit (JDK)

注: Oracle JDKの最新バージョンを利用してパフォーマンスと安定性を向上させるため、TomcatアプリケーションサーバではOracle J2SDK 7.0 Update 75以上を使用することを強くお勧めします。

アプリケーションサーバが適切に動作するように、使用するアプリケーションサーバと互換性のあるJDKバージョンが、アプリケーションサーバとともにインストールされていることを確認してください。

サポート表 (<https://softwaresupport.hpe.com/group/softwaresupport/support-matrices>) を参照してください。

JDKインストールフォルダを指すように**JAVA_HOME**システム変数を追加または変更する必要があります。

注: WebLogicの場合は、WebLogicインストールパッケージに付属するOracle JRockitまたはSun JDKを使用する必要があります。

Oracleは、**開発モード**のWebLogicドメインではSun JDK、**本番モード**のWebLogicドメインではJRockitの使用を推奨しています。詳細については、WebLogicサーバの説明書を参照してください。

- データベースアクセスAPI (使用するDBMSによって異なり、たとえばSQL Serverの場合はODBC)

アプリケーションサーバをホストするコンピュータは、Asset Managerデータベースにアクセスできなければなりません。そのためには、Asset Managerデータベースで使用するDBMS用のデータベースアクセスAPIがそのコンピュータにインストールされている必要があります。

- Asset ManagerインストールプログラムでインストールできるAsset Managerコンポーネント:

- WebサービスとWebクライアント
- Asset Manager API
- LDAP認証 (この機能を実装する場合)

注: Webクライアントの表示に使用する言語バージョンのAsset Managerをインストールします。

多言語設定が可能なAsset Managerデータベースに、この言語が含まれている必要があります。

複数の言語バージョンのWebクライアントをインストールした場合は、同じ数のAsset Manager Webインスタンスをインストールする必要があります (Asset Manager Web ServiceとAsset Manager Web Tier)。

使用する言語が同じデータベースに含まれる場合は、これらのインスタンスはすべてそのデータベースを指定することができます。

言語によって異なるURLによって、Webクライアントで使用する表示言語を選択することができます。

『管理』ガイドの「Asset Managerデータベースの作成、変更、削除」の章、「Asset Managerクライアント言語を変更する」のセクションを参照してください。

注: 必要なライブラリをAsset Manager Webが探ることができるように、以下のシステムライブラリ検索パスに<Asset Managerインストールフォルダ>\bin (32ビット) または<Asset Managerインストールフォルダ>\x64 (64ビット) が含まれていることを確認してください。

- Windowsの場合: 環境変数 **Path**
- Linuxの場合: 環境変数 **LD_LIBRARY_PATH**
- Linuxの場合: 「**ld.so**」の設定ファイルも参照

binと**x64**の両方がパスに記述されている場合は、必要なほうが先に記述されていることを確認してください。

注: Linuxサーバ上にAsset Manager Web Serviceをインストールしている場合、「**.so**」ファイルに注意して「Asset Managerをインストールする」および「APIを使用してAsset Managerデータベースにアクセスする」セクションの指示に従っていることを確認してください。

アプリケーションサーバの設定 - 特別な場合と例

このセクションは、アプリケーションの設定方法を詳細に説明することを意図したものではありません。詳細な設定手順と推奨事項については、アプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。

ここでは、ある特定のハードウェアやソフトウェア構成での、アプリケーションサーバの追加設定について説明します。これらの設定を、アプリケーションサーバに通常必要な設定とともに作成する必要があります。

また、ここでは特定のハードウェアおよびソフトウェア構成での設定例も示します。この例を参照し、ご使用の環境に合うように変更してください。

JVMの設定

- Asset Manager Web TierをLinuxサーバ上にインストールする場合、Java仮想マシン (JVM) がLinuxのグラフィック資源を使用しないように構成する必要があります。
それには、アプリケーションサーバのJVM設定に次のパラメータを追加します。

```
-Djava.awt.headless=true
```

- Asset Manager Web Tierで使用するJVM設定の例:

Asset Manager Web用に確保された8GBのRAMで32ビットオペレーティングシステムにAsset Manager Webを展開する場合:

```
-Xms1500m  
-Xmx1500M  
-XX:+UseParNewGC  
-XX:+UseConcMarkSweepGC  
-XX:+UseTLAB  
-XX:SurvivorRatio=2  
-XX:+UseBiasedLocking  
-XX:NewSize=256m  
-XX:MaxNewSize=256m  
-server
```

Asset Manager Web用に確保された24GBのRAMで64ビットオペレーティングシステムにAsset Manager Webを展開する場合:

```
-Xmx4000m  
-Xms4000m  
-XX:+UseParNewGC  
-XX:+UseConcMarkSweepGC  
-XX:+UseTLAB  
-XX:SurvivorRatio=8  
-XX:NewSize=512m  
-XX:MaxNewSize=512m  
-XX:+UseBiasedLocking  
-Dsun.lang.ClassLoader.allowArraySyntax=true  
-server
```

- Asset Manager Web Serviceで使用するJVM設定の例:

注: Asset Manager Web Serviceプロセスで使用されるメモリは、JVM **-Xmx** パラメータ + Asset Manager APIで使用されるRAMと、DBMSアクセスAPIなどのサードパーティツールの合計です。

32ビットオペレーティングシステムの場合、Asset Manager Web Serviceプロセスで使用されるメモリは2GBを超えることができません。

64ビットオペレーティングシステムの場合、Asset Manager Web Serviceで使用されるメモリは、そのサーバの物理RAMの容量によってのみ制限されます。

Asset Manager Web用に確保された8GBのRAMで32ビットオペレーティングシステムにAsset Manager Webを展開する場合:

```
-Xmx600M
-Xms600M
-XX:+UseTLAB
-XX:+UseParNewGC
-XX:+UseConcMarkSweepGC
-XX:SurvivorRatio=2
-XX:NewSize=128m
-XX:MaxNewSize=128m
-XX:+UseBiasedLocking
-XX:CMSIncrementalDutyCycleMin=0
-XX:CMSIncrementalDutyCycle=10
-XX:CMSInitiatingOccupancyFraction=70
-XX:+UseCMSCompactAtFullCollection
-server
```

Asset Manager Web用に確保された24GBのRAMで64ビットオペレーティングシステムにAsset Manager Webを展開する場合:

```
-Xmx2000M
-Xms2000M
-XX:+UseTLAB
-XX:+UseParNewGC
-XX:+UseConcMarkSweepGC
-XX:SurvivorRatio=2
-XX:NewSize=256m
-XX:MaxNewSize=256m
-XX:+UseBiasedLocking
-server
```

Tomcat特有の設定

- 設定例

以下は、3GHzのIntel Quadcoreプロセッサ2個、8GBのRAMを搭載し、Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを別々のTomcatインスタンスで実行しているコンピュータ上で、Windows Server 2003を使用してテストした際のTomcatの設定例です。

- Asset Manager Web Tier使用のTomcat設定を以下に挙げます。

Asset Manager Webを32ビットオペレーティングシステムに展開する場合:

```
<Connector acceptCount="575" connectionTimeout="900000"
disableUploadTimeout="true" port="8080" redirectPort="8443" maxThreads="550"
```

```
minSpareThreads="200" maxSpareThreads="200" maxKeepAliveRequests="1000"
keepAliveTimeout="180000" />
```

Asset Manager Webを64ビットオペレーティングシステムに展開する場合:

```
<Connector port="8081" maxHttpHeaderSize="8192" maxThreads="300"
minSpareThreads="25" maxSpareThreads="300" enableLookups="false"
redirectPort="8443" acceptCount="700" connectionTimeout="60000"
disableUploadTimeout="true"
maxKeepAliveRequests="1000" keepAliveTimeout="3000" compressionMinSize="2048"
noCompressionUserAgents="gozilla, traviata"
compressableMimeType="text/html,text/xml"/>
```

- Asset Manager Web Service使用のTomcat設定を以下に挙げます。

Asset Manager Webを32ビットオペレーティングシステムに展開する場合:

```
<Connector port="8081" maxThreads="250" minSpareThreads="49"
maxSpareThreads="100" enableLookups="false" redirectPort="8443"
acceptCount="745" debug="0" connectionTimeout="1000"
disableUploadTimeout="true" maxKeepAliveRequests="15" keepAliveTimeout="100"
/>
```

Asset Manager Webを64ビットオペレーティングシステムに展開する場合:

```
<Connector port="8080" maxHttpHeaderSize="8192" maxThreads="900"
minSpareThreads="100" maxSpareThreads="300" enableLookups="false"
redirectPort="8443" acceptCount="1200" connectionTimeout="60000"
disableUploadTimeout="true"
maxKeepAliveRequests="1000" keepAliveTimeout="5000" compression="on"
compressionMinSize="2048" noCompressionUserAgents="gozilla, traviata"
compressableMimeType="text/html,text/xml,text/css,text/javascript"/>
```

取得するライセンス

Asset Manager Web経由 (Asset Manager Web Tier + Asset Manager Web Service経由) で Asset Managerデータベースにアクセスする場合、特別なライセンスは必要ありません。

Asset Manager Webは、Windowsクライアントと同じ方法で処理されます。

Asset Managerデータベースへの接続に使用される固定アクセス、一時アクセス、または不特定アクセスの数は、Windowsクライアント、またはAsset Manager Web Tierのいずれを介しているかにかかわらず、Asset Managerライセンスにより設定されます。

ただし、Asset Manager WindowsクライアントおよびAsset Manager Web以外の方法でAsset Managerデータベースにアクセスする場合に、その方法でAsset Manager Web Serviceを使用するのであれば、特定のAsset Manager Web Serviceライセンスを取得する必要があります。

パスワードの暗号化

インストールの際に、「`package.properties`」ファイルに、特定のパスワードを入力する必要があります。

- Asset Managerデータベースに接続するユーザに関連付けられたパスワード
- Asset ManagerデータベースのMSSQLユーザ、DB2ユーザ、またはOracleアカウントと関連付けたパスワード

または、Webサービスレコード検索の展開中に、コマンドラインツールにパスワードを入力します。

その後、パスワードはPassword-Based Key Derivation Function 2 (PBKDF2) で暗号化されます。2つのキーファイルは、`PBKDF2.Password.First.File`および`PBKDF2.Password.Second.File`パラメータによって定義されます。これら2つのパラメータの詳細については、「[アーカイブファイルを更新する](#)」(68ページ)を参照してください。

Webサービスのタグ付け

Asset Manager Webが正常に展開されたことを確認するには、Asset Manager Web Serviceを展開する前にWebサービスにタグ付けします。

『Tailoring』ガイドの「[Customizing the database](#)」の章、「[Development best practices/Tag the Web services](#)」のセクションを参照してください。

Webサービスに関連付けられた機能ドメインの一貫性の確認

機能ドメインのデータを変更した場合は、Webサービスに影響がないことを確認します。

『Tailoring』ガイドの「[Customizing the database](#)」の章、「[Development best practices/Verify the functional domains associated with the Web services](#)」のセクションを参照してください。

影響がある場合は、`[No such operation 'XXX' (そのような操作はありません 'XXX')]` のようなエラーメッセージが表示されます。

影響がある場合は、Webサービスに再度タグ付けする必要があります。

『Tailoring』ガイドの「[Customizing the database](#)」の章、「[Development best practices/Tag the Web services](#)」のセクションを参照してください。

アーカイブファイルを更新する

Asset Manager Webアプリケーションは、アーカイブファイル（「.war」または「.ear」ファイル）として配布されます。これらは、標準フォーマットに準拠しており、アプリケーションサーバおよびAsset Manager Web用の設定データで構成される「web.xml」ファイルが含まれます。

ベストプラクティス: Asset Manager Web **web.xml**は、決して直接編集しないでください。代わりに、Asset Manager Webの設定可能パラメータは必ず「**package.properties**」ファイル経由で編集し、その後、展開スクリプト（「deploy.bat」または「deploy.sh」）を使用して、アーカイブファイルに含まれる「web.xml」を編集済みのカスタム構成で更新してください。

「.properties」ファイルを編集する

注: プロパティファイルを編集する前に、以下の手順を必ず実行してください。

- ファイルのバックアップコピーをまず作成します。
- アプリケーションサーバが起動している場合は停止します。

編集が必要な「.properties」ファイルは、インストールするアプリケーションによって異なります。

編集する「.properties」ファイルの選択

インストールするWebアプリケーション	このディレクトリの「.properties」ファイルを編集
Asset Manager Webサービス	<Asset Managerインストールフォルダ>\websvc\package.properties
Asset Manager Web Tier	<Asset Managerインストールフォルダ>\webtier\package.properties
Asset Manager Web TierおよびAsset Manager Web Service (同時にインストール)	<Asset Managerインストールフォルダ>\websvc\package.properties <Asset Managerインストールフォルダ>\webtier\package.properties
Asset Manager Record Search	<Asset Managerインストールフォルダ>\websvc\quicksearch.properties

以下のセクションでは、「.properties」ファイルに含まれるパラメータについて説明します。

注: パラメータを変更した場合、パラメータを有効にするには、Asset Manager Web Serviceを再展開する必要があります。たとえば、「**AssetManager.UserPwd**」パラメータを変更した後で、Asset Manager Web Serviceを再展開する必要があります。

Asset Manager Web Service用の「package.properties」パラメータ

ファイルパス:

<Asset Managerインストールフォルダ>\websvc\package.properties

必須のパラメータまたは一般的に変更されることの多いパラメータ

パラメータ	説明	値
DB.engine	Asset Managerのこのインストールで使用されるデータベースエンジン	例: MSSQL
DB.datasource	データベースの名前 注: 64ビットのAsset Manager Webクライアントをインストールする場合は、最初に64ビットのODBC接続を手動で作成する必要があります。	例: AMDemo96en
DB.login	データベースエンジンのログインID	例: sa
DB.cache.enabled	データベースキャッシュが有効かどうか	例: true
DB.cache.dir	キャッシュディレクトリ	例: /tmp
DB.cache.size	キャッシュサイズ (KB単位、1048576 = 1GB)	例: 1048576
DB.expand.typedlinks	Asset Manager Webにタイプ付きリンクを表示する場合、ここでテーブルのSQL名を設定します。	例: amDocument amReconProposal
DB.owner	データベースの所有者	例: itam

パラメータ	説明	値
DB.library.path	<p>aamapi96ライブラリへのパス</p> <ul style="list-style-type: none"> 32ビットオペレーティングシステムに展開する場合、「<Asset Managerインストールフォルダ>bin」に格納されたaamapi96ライブラリを使用する必要があります。 64ビットオペレーティングシステムに展開する場合、「<Asset Managerインストールフォルダ>x64」に格納されたaamapi96ライブラリを使用する必要があります。 	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> Windowsの場合: C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60xx\bin\aamapi96.dll Linuxの場合: /opt/lib/aamapi96.so
AssetManager.UserLogin	<p>WebServiceで使用するAsset Managerユーザログイン</p> <p>注: このパラメータとして使用するためには、ユーザログインが管理者権限を持っている必要があります。</p>	<p>例:</p> <p>Demo</p>
war	<p>このパラメータにより、「<Asset Managerインストールフォルダ>websvc」フォルダにあるものとは別の「.war」ファイルを、変換される「.war」のベースとして使用できるようになります。</p>	<p>例:</p> <p>Asset Manager Web Service: 「../websvc/AssetManagerWebService.war」</p> <p>Asset Manager Web Tier: 「../webtier/AssetManager.war」</p>
war.deployment	<p>「.war」ファイルを展開するかどうか。</p> <p>warを展開すると、warパラメータで指定されたwarが変更されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバがTomcatの場合は、このパラメータの値をtrueに設定します。 アプリケーションサーバがWebSphereまたはWebLogicの場合は、このパラメータの値をfalseに設定します。
ear.deployment	<p>「.ear」ファイルを展開するかどうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバがWebSphereまたはWebLogicの場合

パラメータ	説明	値
	earを展開すると、warファイルのコピーが作成されます。そのコピーを変更して、 ear パラメータで指定された「.ear」ファイルに含めます。	<p>合は、このパラメータの値をtrueに設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバがTomcatの場合は、このパラメータの値をfalseに設定します。
ear	<p>注: このパラメータは、アプリケーションサーバがWebSphereまたはWebLogicのときの展開にのみ関係します。</p> <p>earの展開時に展開スクリプトによって作成される「.ear」の絶対パスまたは相対パス</p>	<p>../weblogic/AssetManager-webservice.ear</p>
PBKDF2.Password.First.File	<p>Adminアカウントとデータベースアカウントのパスワードの暗号化に使用される最初のキーファイルへのパス。</p> <p>このパラメータを指定しない場合、キーファイルは<AMインストール>\deploy\secret-shareフォルダに保存されます。</p> <p>注: すべてのAsset Manager Webサービスインスタンスがアクセスできるパスを使用することを強くお勧めします。</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> Windowsの場合: c:\\temp\\secret1.txt Linuxの場合: c:/temp/secret1.txt
PBKDF2.Password.Second.File	<p>Adminアカウントとデータベースアカウントのパスワードの暗号化に使用される2番目のキーファイルへのパス。</p> <p>このパラメータを指定しない場合、キーファイルは<AMインストール>\deploy\secret-shareフォルダに保存されます。</p> <p>注: すべてのAsset Manager Webサービス</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> Windowsの場合: c:\\temp\\secret1.txt Linuxの場合: c:/temp/secret1.txt

パラメータ	説明	値
	インスタンスがアクセスできるパスを使用することを強くお勧めします。	

オプションのパラメータまたは編集することの少ないパラメータ:

パラメータ	説明	値
DB.password	MSSQL、DB2、またはOracleデータベースのパスワード。 これを「 package.properties 」ファイルに入力した場合、展開スクリプトの実行時には入力の必要がありません。	パスワードの暗号化されていない形式を入力します。 展開スクリプトによって、Asset Manager Web Serviceの「 web.xml 」で使用するパスワードが暗号化されます。 注: <code>promptForPwd</code> が <code>true</code> に設定されている場合は、空白のままにします。
AssetManager.UserPwd	Asset Managerデータベースのユーザログインのパスワード これを「 package.properties 」ファイルに入力した場合、展開スクリプトの実行時には入力の必要がありません。	パスワードの暗号化されていない形式を入力します。 展開スクリプトによって、Asset Manager Web Serviceの「 web.xml 」で使用するパスワードが暗号化されます。 注: <code>promptForPwd</code> が <code>true</code> に設定されている場合は、空白のままにします。
promptForPwd	このパラメータが <code>true</code> に設定されている場合は、展開スクリプトの実行時に必要なすべてのパスワードの入力がユーザに求められます。 その場合は、パスワードを「 package.properties 」ファイルに格納する必要はありません。	例: <code>true</code>
ant.tasks.dir	展開スクリプトで要求される「 .jar 」ファイルの場所	例: lib

パラメータ	説明	値
	スクリプトで使用するのは、デフォルトでは 「<Asset Managerインストールフォルダ>\deploylib」ディレクトリにあるファイルです。	
combination.ear	<p>注: このパラメータは、アプリケーションサーバが WebSphereまたは WebLogicのときの展開にのみ関係します。</p> <p>作成される「.ear」ファイルに WebTierとWebServiceの両方を含める (true) か含めないか (false)</p>	<p>例:</p> <p>true</p>
manifest.classpath	<p>注: このパラメータは、アプリケーションサーバが WebSphereまたは WebLogicのときの展開にのみ関係します。</p> <p>Java classpathへの追加のファイル参照。(これらのファイルは、addl.filesパラメータで、「.ear」ファイルに追加する必要があります)</p>	<p>/am-jni-96.jar /am-constants-96.jar</p> <p>注: Asset Manager Webを正しく動作させるには、これらのデフォルトのファイル参照を保持する必要があります。</p>
addl.files.root	<p>注: このパラメータは、アプリケーションサーバが WebSphereまたは WebLogicのときの展開にのみ関係します。</p> <p>addl.filesによって参照されるすべてのファイルがあるベースディレクトリ</p>	<p>例:</p> <p>..</p>
addl.files	<p>注: このパラメータは、アプリケーションサーバが WebSphereまたは WebLogicのときの展開にのみ関係します。</p> <p>Asset Manager Webの変更</p>	

パラメータ	説明	値
	済みの「.war」に加えて、「.ear」ファイルに追加するファイルのリスト (warパラメータを参照)	

他のAsset Manager Web Serviceパラメータの詳細については、『Tailoring』ガイドの「Customizing Web clients」の章、「Modifying the Web client's default behavior」のセクションを参照してください。

Asset Manager Web Tier用の「package.properties」パラメータ

ファイルパス:

<Asset Managerインストールフォルダ>\webtier\package.properties

必須のパラメータまたは一般的に編集されることの多いパラメータ

パラメータ	説明	値
WebService.EndPoint.SOAP	SOAP Asset Manager Web Serviceの URL	例: http://localhost:8080/AssetManagerWebService/services 注: 使用されるホスト名とポートは、アプリケーションサーバによって異なります。そのため、URLを変更する必要があります。
WebService.EndPoint.REST	REST Asset Manager Web Serviceの URL	例: http://localhost:8080/AssetManagerWebService/rest 注: 使用されるホスト名とポートは、アプリケーションサーバによって異なります。そのため、URLを変更する必要があります。
WebService.EndPoint.RS	RS Asset Manager Web Serviceの URL	例: http://localhost:8080/AssetManagerWebService/rs 注: 使用されるホスト名とポートは、アプリケーションサーバによって異なります。そのため、URLを変更する必要があります。
WebService.Version	使用する Asset Manager	例: Head

パラメータ	説明	値
	Web Serviceタグ	
war.deployment	<p>「.war」ファイルを展開するかどうか。</p> <p>warを展開すると、warパラメータで指定されたwarが変更されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバがTomcatの場合は、このパラメータの値をtrueに設定します。 アプリケーションサーバがWebSphereまたはWebLogicの場合は、このパラメータの値をfalseに設定します。
ear.deployment	<p>「.ear」ファイルを展開するかどうか。</p> <p>earを展開すると、warファイルのコピーが作成されます。そのコピーを変更して、earパラメータで指定された「.ear」ファイルに含めます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバがWebSphereまたはWebLogicの場合は、このパラメータの値をtrueに設定します。 アプリケーションサーバがTomcatの場合は、このパラメータの値をfalseに設定します。
ear	<p>注: このパラメータは、アプリケーションサーバがWebSphereまたはWebLogicのときの展開にのみ関係します。</p> <p>earの展開時に展開スクリプトによって作成される「.ear」の絶対パスまたは相対パス</p>	../weblogic/AssetManager-webservice.ear
combination.ear	<p>注: このパラメータは、アプリケーションサーバがWebSphere</p>	<p>例:</p> <p>true</p>

パラメータ	説明	値
	<p>または WebLogicの ときの展開に のみ関係しま す。</p> <p>作成される「.ear」 ファイルにWebTier とWebServiceの 両方を含める (true) か含めない か (false)</p>	
FullTextSearch.Enabled	<p>全文検索を有効 または無効にする。</p> <p>Record Searchを 有効にする場合 は、このパラメータ を有効にする必 要があります。</p>	<p>例: true</p>
FullTextSearch.Server.URL	<p>全文検索サーバ のURL。</p> <p>Record Searchを 有効にする場合 は、このパラメータ を設定する必要 があります。</p>	<p>例: http://<ホスト名>.<ドメイン >:<AssetManagerWebServicePort>/quickse arch/search</p>
PBKDF2.Password.First.File	<p>Adminアカウントと データベースアカ ウントのパスワードの 暗号化に使用さ れる最初のキー ファイルへのパス。</p> <p>このキーファイル は、実行時間中 に使用されます。</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Windowsの場合: c:\temp\secret1.txt • Linuxの場合: c:/temp/secret1.txt
PBKDF2.Password.Second. File	<p>Adminアカウントと データベースアカ ウントのパスワードの 暗号化に使用さ れる2番目のキー</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Windowsの場合: c:\temp\secret1.txt • Linuxの場合: c:/temp/secret1.txt

パラメータ	説明	値
	<p>ファイルへのパス。</p> <p>このキーファイルは、実行時間中に使用されます。</p>	
Documents.Downloads.OpenInBrowser.AllowedFileTypes	<p>Asset Managerからダウンロード可能な許可されるファイルタイプのリスト。ファイルタイプがリストにないのに、ダウンロードを試みた場合、ファイルはダウンロードされますが、ファイル拡張子に"."文字が追加されます。たとえば、xlsファイルタイプがリストにない場合、ダウンロードされた.xlsファイルの名前は_xlsに変更されます。</p> <p>デフォルトでは、このパラメータはpackage.propertiesファイルになく、このパラメータを編集するには、手動でパラメータを作成する必要があります。デフォルトでは、リストに、.txt、.pdf、.png、.gif、.jpg、.jpegの各ファイルタイプが含まれています。</p>	<p>例:</p> <p>txt pdf png gif jpg jpeg xls xlsx</p>

編集することの少ないパラメータ:

パラメータ	説明	値

war	このパラメータにより、「<Asset Managerインストールフォルダ>websvc」フォルダにあるものとは別の「.war」ファイルを変換される「.war」のベースとして使用できるようになります。	例: ../websvc/AssetManager.war
ant.tasks.dir	展開スクリプトで要求される「.jar」ファイルの場所 スクリプトで使用するものは、デフォルトでは「<Asset Managerインストールフォルダ>\deploy\lib」ディレクトリにあるファイルです。	例: lib
Workflows.Diagrams.Captions.Font	このパラメータは、Webクライアントに表示されるワークフロー図内のテキストのフォントを設定します。 Windowsの場合、以下からフォントリストを見つけることができます。 http://www.microsoft.com/typography/fonts/product.aspx?PID=161	例: Arial
ListDetail.layout	このパラメータは、単一のページにリストおよびリストの詳細を表示する方法を定義します。	例: <ul style="list-style-type: none">• Horizontal• Vertical
PBKDF2.Password.Splitting	PBKDF2パスワードの分割を必要とするWebアプリケーションを区別するためのフラグ。変更しないでください。 注: combination.ear=trueが設定されている場合にのみ、この属性が必要になります。websvc\package.propertiesから同じエントリをコピーして貼り付けます。	例: <ul style="list-style-type: none">• True
org.owasp.csrfguard.Enabled	このプロパティは、CSRF保護を有効にするかどうかを決定します。このプロパティをtrueに編集して保護を有効にし、クライアントがサーバに接続時に、トークンを使用するように要求することができます。デフォルト値はTrueです。 注: 場合によっては、負荷分散サーバからの依頼は、クロスサイトアクセスと見なされることがあります。これにより、依頼は拒否されます。このような状況が発生しないようにするには、負荷分散サーバを適切に設定するか、csrfguardを無効にします。	例: <ul style="list-style-type: none">• True

	<p>csrfguardを無効にすると、セキュリティリスクが発生する可能性があるため、このプロパティを無効にするより、負荷分散サーバを設定することを強くお勧めします。</p>	
Lists.RemoveLinkNameInHeader	<p>このプロパティをFalse (デフォルト値) に設定すると、フィールドのSQL名がリストの見出しに表示されます。</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> False
maskMessageDelay	<p>このプロパティは、読み込み中のアイコンの表示時点を制御します。デフォルトでは、この値は3で、読み込み中のアイコンは操作後3秒間表示されます。</p> <p>注: この値は0~30でのみ設定可能で、この範囲外の値は3にリセットされます。</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> 3
WebService.Timeout	<p>このプロパティは、Webサービス呼び出しのタイムアップ時点を制御します。</p> <p>デフォルトでは、この値は600,000 (ms) で、Web TierがWebサービスから10分間応答を受信しなければ、タイムアウトが発生します。</p> <p>たとえば、完了までの時間が10分を超える操作があるとします。ただし、タイムアウト期間はこのプロパティによって600,000 ms (10分) と設定されます。このような状況では、操作を正常に完了させるために、このプロパティの値を増やす必要があります。</p> <p>注: この値には300,000 (ms) より大きい値のみ設定可能で、これより小さい値は300,000 (ms) にリセットされます。</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> 600,000
Exports.Excel.OneTime_Fetching_Size	<p>レコードをExcelにエクスポートしている場合、このプロパティはAsset Managerが1つの呼び出しで読み込むレコード数を示します。</p> <p>デフォルトでは、このプロパティの値は1000です。</p> <p>たとえば、10000レコードをExcelファイルにエクスポートするとします。このプロパティが2000に設定されている場合、Asset Managerでは、レコードの呼び出しに5回のWebサービス呼び出しが必要で、各呼び出しで2000レコードずつ読み込みます。このプロパティはパフォーマンスの調整にのみ使用され、出力には影響を与えません。</p>	<p>例:</p> <p>1000</p>
Lists.RemoveLinkName	<p>このプロパティは、リストの見出しにリンク名を表</p>	<p>例:</p>

InHeader	<p>示 するかどうかを制御します。</p> <p>この値がTrueの場合、リンクは表示されません。この値がFalseの場合、リンクが表示されます。</p> <p>デフォルトでは、このプロパティはFalseに設定されます。</p>	False
Lists.Checkbox.AutoSync	<p>このプロパティは、チェックボックスのステータスをバックエンドに即座に同期させるかどうかを制御します。</p> <p>たとえば、チェックボックスをオンにして、レコードに対して変更を行う前にページを更新するとします。このプロパティがFalseに設定されている場合、選択内容はクリアされます。このプロパティがTrueに設定されている場合、クリアはされません。</p> <p>注: デフォルトでは、このプロパティはFalseに設定されます。オンにすると、パフォーマンスに影響を与える可能性があります。</p>	例: False
Fields.Labels.AutoEllipsis	<p>このプロパティがTrueに設定されている場合、ラベルの長いテキストがWebクライアント上で省略記号付きの短いテキストとして表示されます。カーソルをラベル上に置くと、すべての値を確認できます。</p> <p>デフォルトでは、このプロパティはFalseに設定されます。</p>	例: False
sessionTimeout	<p>このプロパティは、ユーザーセッションのタイムアウト(分)を表します。デフォルトでは30に設定されています。</p>	例: 30
uploadMaxFileSize	<p>Asset Managerによってアップロードできるファイルの最大サイズ。単位を追加しなかった場合、デフォルトでバイト単位になります。次のいずれかの単位を追加することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • m (MBを表します) • g (GBを表します) • k (KBを表します) <p>注: 単位は小文字である必要があります。</p>	例: <ul style="list-style-type: none"> • 1 • 1k • 1m • 1g
Navigation.DisabledModules	<p>Webクライアントのナビゲーションで特定のモ</p>	例:

	<p>ジュールを非表示にする場合、モジュール名 (カンマ区切り) をこのプロパティに追加します。</p> <p>このプロパティを使用する場合、Record Search プロパティファイル内に同じ値を持つ同じプロパティを作成して、Record Search機能がこれらのモジュールを考慮しないようにすることをお勧めします。</p>	Cables,Contracts
--	---	------------------

Asset Manager Record Search用の「quicksearch.properties」パラメータ

ファイルパス:

<Asset Managerインストールフォルダ>\websvc\quicksearch.properties

必須のパラメータまたは一般的に編集されることの多いパラメータ

パラメータ	説明	値
AssetManager.RecordSearchIndexDir	全文レコード検索用のインデックスディレクトリ	例: c:/index
AssetManager.ServiceTag	全文テキスト検索用のAsset Managerサービスタグ名	例: Head
AssetManager.UserLogin	<p>WebServiceで使用するAsset Managerユーザログイン</p> <p>注: このパラメータとして使用するためには、ユーザログインが管理者権限を持っている必要があります。</p>	例: Demo
DB.engine	Asset Managerのこのインストールで使用されるデータベースエンジン	例: MSSQL
DB.datasource	データベースの名前	例: AMDemo96en
DB.login	データベースエンジンのログインID	例: sa
DB.owner	データベースの所有者	例: itam

パラメータ	説明	値
war.deployment	<p>「.war」ファイルを展開するかどうか。</p> <p>warを展開すると、warパラメータで指定されたwarが変更されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバがTomcatの場合は、このパラメータの値をtrueに設定します。 アプリケーションサーバがWebSphereまたはWebLogicの場合は、このパラメータの値をfalseに設定します。
ear.deployment	<p>「.ear」ファイルを展開するかどうか。</p> <p>earを展開すると、warファイルのコピーが作成されます。そのコピーを変更して、earパラメータで指定された「.ear」ファイルに含めます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバがWebSphereまたはWebLogicの場合は、このパラメータの値をtrueに設定します。 アプリケーションサーバがTomcatの場合は、このパラメータの値をfalseに設定します。
LWSSO.domain	Record Searchをインストールするドメインの名前	例: yourdomain.net
LWSSO.userNameHeaderName	要求のヘッダーキーに含まれるユーザ名	例: SM_USER
LWSSO.initString	共有暗号化キー	例: lwss0-shared-encryption-key
PBKDF2.Password.First.File	<p>Adminアカウントとデータベースアカウントのパスワードの暗号化に使用される最初のキーファイルへのパス。</p> <p>このキーファイルは、実行時間中に使用されます。</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> Windowsの場合: c:\temp\secret1.txt Linuxの場合: c:/temp/secret1.txt
PBKDF2.Password.Second.File	<p>Adminアカウントとデータベースアカウントのパスワードの暗号化に使用される2番目のキーファイルへのパス。</p> <p>このキーファイルは、実行時間中に使用されます。</p>	<p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> Windowsの場合: c:\temp\secret1.txt Linuxの場合: c:/temp/secret1.txt

編集することの少ないパラメータ:

パラメータ	説明	値
AssetManager.CronConfig	全文インデックスのスケジューラ設定	例: 0 0 1 * * ?
AssetManager.TopTreeNumber	1つの検索結果ページに表示する最大セクション数	例: 10
AssetManager.TreeRecordsNumber	1つのセクションの最大レコード数	例: 100
AssetManager.IndexRsNumber	インデックス付き結果の最大数	例: 5000
AssetManager.UserPwd	Asset Managerデータベースのユーザログインのパスワード これを「 package.properties 」ファイルに入力した場合、展開スクリプトの実行時には入力の必要がありません。	パスワードの暗号化されていない形式を入力します。 展開スクリプトによって、Asset Manager Web Serviceの「 web.xml 」で使用するパスワードが暗号化されます。
DB.password	MSSQL、DB2、またはOracleデータベースのパスワード。 これを「 package.properties 」ファイルに入力した場合、展開スクリプトの実行時には入力の必要がありません。	パスワードの暗号化されていない形式を入力します。 展開スクリプトによって、Asset Manager Web Serviceの「 web.xml 」で使用するパスワードが暗号化されます。
arch	32ビットまたは64ビットバージョンのアプリケーション	例: 64
Navigation.DisabledModules	Web TierのプロパティファイルでNavigation.DisabledModulesプロパティを設定した場合、同じ値を持つこのプロパティを設定して、Record Search機能がこれらのモジュールを考慮しないようにすることをお勧めします。	例: Cables,Contracts

キーファイルの生成

展開スクリプトを使用してアーカイブファイルを更新する前に、管理者権限でCMDウィンドウをトリガし、generatepassword.batファイル(Windowsの場合)またはgenerate-password.sh(Linuxの場合)を実行して、キーファイルを生成する必要があります。

デフォルトでは、generate-password.batファイルまたはgenerate-password.shファイルを実行すると、キーファイルが、secret1.txtおよびsecret2.txtという名前で、<AMインストール>\deploy\secret-shareフォルダ内に作成されます。Webサービス、Web Tier、およびレコード検索のpackage.properties(またはquicksearch.properties)ファイルで**PBKDF2.Password.First.File**および**PBKDF2.Password.Second.File**プロパティを設定した場合、キーファイルを指定したフォルダに手動でコピーする必要があります。

たとえば、Webサービスのpackage.propertiesファイルで、**PBKDF2.Password.First.File**をc:\temp\key1.txtに設定し、**PBKDF2.Password.Second.File**をc:\temp\key2.txtに設定します。generate-password.batファイルを実行したら、<AMインストール>\deploy\secret-shareフォルダ内のsecret1.txtおよびsecret2.txtファイルをc:\tempフォルダにコピーし、それらの名前をkey1.txtおよびkey2.txtに変更する必要があります。

注意: すべてのWeb ServiceおよびWeb Tierサーバは、同一セットのキーファイルを共有する必要があります。異なるキーファイルを持つWeb ServiceおよびWeb Tierサーバは、相互に通信できません。

スクリプトを生成しているキーファイルのパスとファイル名は次のとおりです。

Windows	<p><Asset Managerインストールフォルダ>\deploy\generate-password.bat</p> <p>例:</p> <p>C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\deploy\generate-password.bat</p>
Linux	<p><Asset Managerインストールフォルダ>/deploy/generate-password.sh</p> <p>例:</p> <p>/home/<user>/AssetManager/deploy/generate-password.sh</p>

展開スクリプトを使用してアーカイブファイルを更新する

展開スクリプトのパスとファイル名は次のとおりです。

Windows	<p><Asset Managerインストールフォルダ>\deploy\deploy.bat</p> <p>例:</p> <p>C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\deploy\deploy.bat</p>
Linux	<p><Asset Managerインストールフォルダ>/deploy/deploy.sh</p> <p>例:</p> <p>/home/<user>/AssetManager/deploy/deploy.sh</p>

Windowsの場合

アーカイブファイルを更新するには:

- 展開スクリプトを実行する前に、展開するWebアプリケーションの「.properties」ファイルに正しいパラメータ値を設定していることを確認します。パラメータの説明を参照してください。
 - Asset Manager Web Serviceを展開する場合: [Asset Manager Web Service用の「package.properties」パラメータ](#)
 - Asset Manager Web Tierを展開する場合: [Asset Manager Web Tier用の「package.properties」パラメータ](#)
 - Asset Manager Record Searchを展開する場合: [Asset Manager Record Search用の「quicksearch.properties」パラメータ](#)
- 必要に応じて、『Tailoring』ガイドの「Customizing Web clients」の章、「Modifying the Web client's default behavior」のセクションに記載されているようにAsset Manager Web Serviceパラメータのいずれかを変更します。
- コマンドラインウィンドウを開きます。
- 「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\deploy」フォルダに移動します。

注意: 「deploy」ディレクトリの「.war」ファイルは変更されるので、事前にバックアップする必要があります。

Web ServiceおよびWeb Tierのアーカイブを更新するには、次のコマンドラインを実行します。

```
deploy.bat [/64] [/ws8] <「package.properties」への相対パス>
```

/64または**/x64**: 64ビットバージョンのWindowsにAsset Manager Web Serviceを展開する場合は、このパラメータを使用します。

/ws8: WebSphere Application Serverのバージョン8を展開する場合は、このパラメータを使用します (WebSphere Application Serverの以前のバージョンの場合はパラメータ不要)。

例:

```
deploy.bat /64 C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60  
xx\websvc\package.properties
```

注: package.propertiesファイルでAdminアカウントとデータベースアカウントのパスワードを指定していない場合、それらのパスワードを入力する必要があります。

5. Record Searchのアーカイブを更新するには、次のコマンドラインを実行します。

```
deploy.bat [/wls12c] [/ws8] <「quicksearch.properties」への相対パス>
```

/wls12c: WebLogic Server 12cを展開する場合は、このパラメータを使用します。

/ws8: WebSphere Application Serverのバージョン8を展開する場合は、このパラメータを使用します (WebSphere Application Serverの以前のバージョンの場合はパラメータ不要)。

例:

```
deploy.bat ..\websvc\quicksearch.properties
```

注: package.propertiesファイルでAdminアカウントとデータベースアカウントのパスワードを指定していない場合、それらのパスワードを入力する必要があります。

Linuxの場合

1. 展開スクリプトを実行する前に、展開するWebアプリケーションの「.properties」ファイルに正しいパラメータ値を設定していることを確認します。パラメータの説明を参照してください。
 - Asset Manager Web Serviceを展開する場合: [Asset Manager Web Service用の「package.properties」パラメータ](#)
 - Asset Manager Web Tierを展開する場合: [Asset Manager Web Tier用の「package.properties」パラメータ](#)
 - Asset Manager Record Searchを展開する場合: [Asset Manager Record Search用の「quicksearch.properties」パラメータ](#)

- 必要に応じて、『Tailoring』ガイドの「Customizing Web clients」の章、「Modifying the Web client's default behavior」のセクションに記載されているようにAsset Manager Web Serviceパラメータのいずれかを変更します。
- 次の環境変数が設定されていることを確認します。

変数	値
JAVA_HOME (Tomcatを使用している場合)	JDKインストールディレクトリへのパス。
TMPDIR	コンパイル時に使用する一時ディレクトリへのパス。 「 deploy.sh 」は、デフォルトでは「 /tmp 」ディレクトリを使用します。

- コマンドシェルを開きます。
- 「<Asset Managerインストールフォルダ>/deploy」フォルダに移動します。
- 注意:** 「**deploy**」ディレクトリの「**.war**」ファイルは変更されるので、事前にバックアップする必要があります。

次のコマンドラインを実行します。

```
deploy.sh [-ws8] <「.properties」ファイルへの相対パス>
```

-ws8: WebSphere Application Serverのバージョン8を展開する場合は、このパラメータを使用します (WebSphere Application ServerおよびAsset Manager Web Serviceアプリケーションの以前のバージョンの場合はパラメータ不要)。

例:

```
deploy.sh -ws8 ../websvc/package.properties
```

注: このコマンドをLinuxシステムで実行すると、次のような警告メッセージが表示されることがあります。

```
expr: warning: unportable BRE: `^\\((-D\\)..*=.*': using `^' as the first
character of the basic regular expression is not portable; it is being
ignored
expr: warning: unportable BRE: `^\\(-\\)..*': using `^' as the first
character of the basic regular expression is not portable; it is being
ignored
```

この警告は無視することができます。

アーカイブファイルをアプリケーションサーバに展開する

パフォーマンス上の理由で、本番モードのAsset Manager Web ServiceとAsset Manager Web Tierは、2つの別々のアプリケーションサーバにインストールする必要があります。

これらのインスタンスは、同じコンピュータ上に配置できます。

たとえば、Tomcatを使用している場合、Tomcatは2つ別々のフォルダにインストールする必要があります。1つはAsset Manager Web Service用、もう1つはAsset Manager Web Tier用です。

Tomcatがアプリケーションサーバの場合

以下の手順を実行して、アーカイブファイル(「.war」ファイル)をTomcatアプリケーションサーバに展開します。

注: Web Tier用に必要な最小限のJVMパラメータ:

```
-Xms1024m -Xmx1024m -XX:PermSize=128M -XX:MaxPermSize=256m
```

Web Service用に必要な最小限のJVMパラメータ:

```
-Xms1024m -Xmx1024m -XX:PermSize=128M -XX:MaxPermSize=256m
```

Java 8では、PermSizeをMetaspaceSizeに、MaxPermSizeをMaxMetaspaceSizeに置き換えます。

本番でのJVM設定の詳細については、『Asset Manager Deployment Sizing Guide』を参照してください。

Asset Manager Web Serviceのインストール

1. 展開するアーカイブファイル(「**AssetManagerWebService.war**」)が、使用するカスタム構成で更新されていることを確認します。

「[アーカイブファイルを更新する](#)」参照。

2. 「<Asset Managerインストールフォルダ>\websvc\AssetManagerWebService.war」をTomcatインストールフォルダの「webapps」サブフォルダにコピーします。

注: 以前に「.war」ファイルが展開済みの場合は、既存の「.war」ファイルおよび同じ名前のサブフォルダを削除してから、「.war」ファイルを「webapps」フォルダにコピーする必要があります。

3. TomcatのJavaプロパティを入力します。

プロパティ	値
Java Classpath	J2SE SDKの「tools.jar」への完全パスを追加します (デフォルトの格納場所は、J2SE SDKインストールフォルダの「lib」サブフォルダです)。 パスは同一行に書き、セミコロン「;」で区切ります。
Java Options	<p>「amjnii96.dll」ファイルが入っているフォルダへの完全パスを追加します (デフォルトの場所は、「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\bin」(32ビット) または「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\x64」フォルダ (64ビット) で、「xx」は、ご使用のAsset Managerの言語を表す2文字の言語コードです)。</p> <p>パラメータの例:</p> <pre>-Djava.library.path=C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\bin</pre> <p>注: 64ビットOSの場合に、Asset Managerインストールフォルダのx64サブフォルダおよびbinサブフォルダへのパスが両方ともDjava.library.pathに含まれるときは、x64へのパスがbinへのパスより先に記述されていることを確認してください。</p> <p>注: Webクライアント経由で大きなファイルを頻りにアップロードする場合、サーバの起動パラメータとしてJAVAオプションのjava.io.tmpdirを設定する必要があります。これを行う場合、Web Tierサーバ上に一時フォルダを作成する必要があります。</p> <p>たとえば、次のエントリがある場合、C:\Tomcat 7.0の下に一時フォルダを作成する必要があります。</p> <pre>-Djava.io.tmpdir=C:\Tomcat 7.0\temp</pre> <p>java.io.tmpdirを設定しない場合、一時フォルダはオペレーティングシステムによって生成されます。場所は「C:\Local\usera\Temp」のようになります。この場合、この一時フォルダの読み取りおよび書き込み権限をWeb Tierサーバに付与する必要があります。</p>

4. Tomcatを起動します。

5. セクション「[Asset Manager Web Serviceが正しく展開されたかどうかテストする](#)」に進みます。**Asset Manager Web Tierのインストール**

1. 展開するアーカイブファイル(「AssetManager.war」)が、使用するカスタム構成で更新されているこ

とを確認します。

「[アーカイブファイルを更新する](#)」参照。

2. 「<Asset Managerインストールフォルダ>\webtier\」フォルダの「AssetManager.war」ファイルと「AssetManagerDOC.war」ファイルをTomcatインストールフォルダの「webapps」サブフォルダにコピーします。

注: 以前に「.war」ファイルが展開済みの場合は、既存の「.war」ファイルおよび同じ名前のサブフォルダを削除してから、「.war」ファイルを「webapps」フォルダにコピーする必要があります。

AM Webのオンラインヘルプ用のアーカイブファイル「AssetManagerDOC.war」ファイルは、この手順ではオプションです。

3. TomcatのJavaプロパティを入力します。

プロパティ	値
Java Classpath	J2SE SDKの「tools.jar」への完全パスを追加します (デフォルトの格納場所は、J2SE SDKインストールフォルダの「lib」サブフォルダです)。 パスは同一行に書き、セミコロン「;」で区切ります。

4. Tomcatを起動します。
5. セクション「[Asset Manager Web Tierが正しく展開されたかどうかテストする](#)」に進みます。

Asset Manager Record Searchのインストール

1. 展開するアーカイブファイル(「quicksearch.war」)が、使用するカスタム構成で更新されていることを確認します。
「[アーカイブファイルを更新する](#)」参照。

2. 「<Asset Managerインストールフォルダ>\websvc\quicksearch.war」をTomcatインストールフォルダの「webapps」サブフォルダにコピーします。

注: 以前に「.war」ファイルが展開済みの場合は、既存の「.war」ファイルおよび同じ名前のサブフォルダを削除してから、「.war」ファイルを「webapps」フォルダにコピーする必要があります。

3. Tomcatを起動します。
4. Asset Manager SSOを有効にします。これには、以下の手順を実行します。
 - a. 次のURLを表示します。

http://<Asset Manager Web Serviceサーバの名前またはIPアドレス>:<Asset Manager Web Serviceポート>/AssetManagerWebService/ssoConfig.jsp

例: <http://localhost:8080/AssetManagerWebService/ssoConfig.jsp>

- b. [Enable LW-SSO framework] チェックボックスをオンにし、[Domain name]、[Shared encryption key]、および [Request header key containing the user name] フィールドに入力します。

入力した文字列が、「quicksearch.properties」ファイルに設定した対応する文字列と同じであることを確認します。「Asset Manager Record Search用の「quicksearch.properties」パラメータ」を参照してください。

5. Tomcatを再起動します。

注: パフォーマンス上の考慮から、Record SearchおよびAM Web Serviceを別のWebサーバに展開することをお勧めします。

注: Record Searchを有効にするには、パラメータを次のように設定してAsset Manager Web Tierを展開する必要があります。

- FullTextSearch.Enabled=True
- FullTextSearch.Server.URL=http://<ホスト名>.<ドメイン>:<AssetManagerWebServicePort>/quicksearch/search

「Asset Manager Web Tier用の「package.properties」パラメータ」を参照してください。

AM Webでのオンラインヘルプのインストール

1. 「<Asset Managerインストールフォルダ>\webtier\AssetManagerDOC.war」をTomcatインストールフォルダの「webapps」サブフォルダにコピーします。

注: 以前に「.war」ファイルが展開済みの場合、既存の「.war」ファイルおよび同じ名前のサブフォルダを削除してから、「.war」ファイルを「webapps」フォルダにコピーする必要があります。

2. Tomcatを起動します。

WebSphere Application Serverがアプリケーションサーバの場合

注: 以下の展開手順は、WebSphere Application Server 8.0のインタフェースに基づいています。他のバージョンのWebSphere Application Serverでの手順はわずかに異なる場合があります。

WebSphere Application Server 7.0を使用する場合、[class loader order] を [Classes loaded with local class loader first (parent last)] に変更する必要があります。

Asset Manager Web Serviceのインストール

ここでは、Asset Manager Web ServiceをAsset Manager Web Tierとは別にインストールする方法について説明します。

Asset Manager Web ServiceとAsset Manager Web Tierを同時にインストールするには: [Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを同時にインストールする](#)

1. 展開するアーカイブファイル(「**AssetManager-webservice.ear**」)が、使用するカスタム構成で更新されていることを確認します。

「[アーカイブファイルを更新する](#)」参照。

注: 更新されたアーカイブファイルは、デフォルトでは「<Asset Managerインストールフォルダ>\weblogic」フォルダにあります。

2. WebSphere Application Serverを起動します。
3. WebSphere Application Serverの管理コンソールを開きます。
4. ナビゲーションバーで、[**Environment** / **Shared Libraries**] をクリックします。
5. [**New**] ボタンをクリックします。
6. 次のフィールドに値を入力します。

パラメータ	値
Name	am-native-lib
Description	Asset Managerネイティブライブラリ
Classpath	.
Native Library Path	Asset Managerのバイナリディレクトリへのパス。例: <ul style="list-style-type: none"> ○ Asset Manager Webを32ビットOSに展開する場合: 「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\bin」。ここで、「xx」は、ご使用のAsset Managerの言語を表す2文字の言語コードです。 ○ Asset Manager Webを64ビットOSに展開する場合: 「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\x64」。ここで、「xx」は、ご使用のAsset Managerの言語を表す2文字の言語コードです。

7. [**OK**] をクリックします。
8. [**Messages**] 枠で [**Save**] リンクをクリックします。
9. ナビゲーションバーで、[**Applications** / **New Application**] を選択します。
10. [**New Application**] ページで、[**New Enterprise Application**] をクリックします。

11. 次のフィールドに値を入力します。

パラメータ	値
Local file system/ Full path	「AssetManager-webservice.ear」ファイルへのパスです。

12. **[Next]** ボタンをクリックします。
13. **[Detailed: Show all installation options and parameters]** オプションを選択し、**[Next]** ボタンをクリックします。
Webアプリケーションをインストールするために実行する一連のステップが表示されます。
14. 手順4 (共有ライブラリのマップ): テーブルから、**[AssetManagerWebService]** (URI: AssetManagerWebService.war, WEB-INF/web.xml) を選択します。
15. **[Reference shared libraries]** ボタンをクリックします。
16. 新規ライブラリ: **[am-native-lib]** を選択します。
17. インストールウィザードの残りのステップを完了します。
18. **[Finish]** ボタンをクリックして、インストールを開始します。
19. すべてが正常に機能すると、トレースウィンドウにAssetManagerWebServiceインストールが正常に実行されたことを示すメッセージが表示されます。
20. 該当するリンクをクリックして、変更を保存します。
21. ナビゲーションバーで、**[Servers / Server Types / WebSphere application servers]** を選択します。
22. アプリケーションサーバをクリックします。
23. **[Configuration]** タブの **[Server Infrastructure]** セクションで、**[Java and Process Management]** をクリックし、**[Process definition]** をクリックします。
24. **[Additional Properties]** セクションで、**[Java Virtual Machine]** をクリックします。
25. **[Generic JVM arguments]** ボックスに、次のように入力します。
-Djava.library.path=\$(APP_INSTALL_ROOT)/<セルの名前>/AssetManager-webservice.ear
26. **[Initial heap size]** ボックスには、「1024」と入力することをお勧めします。
27. **[Maximum heap size]** ボックスには、「2048」と入力することをお勧めします。
28. **[OK]** をクリックします。
29. **[Messages]** 枠で **[Save]** リンクをクリックします。
30. もう一度 **[OK]** をクリックします。
31. **[Messages]** 枠で、もう一度 **[Save]** リンクをクリックします。

32. ナビゲーションバーで、[Servers / Server Types / WebSphere application servers] を選択します。
33. アプリケーションサーバをクリックします。
34. [Configuration] タブの [Server Infrastructure] セクションで、[Java and Process Management] をクリックし、[Java SDKs] をクリックします。
35. [1.7_64] または [1.7_32] チェックボックスをオンにします。

注: [1.7_64] または [1.7_32] チェックボックスが存在しない場合は、IBM Installation Managerを起動し、IBM WebSphere SDK java Technology Editionをインストールします。

36. [Make Default] をクリックします。
37. ナビゲーションバーで、[Applications / WebSphere enterprise applications] を選択します。
38. [AssetManagerWebService] をクリックします。
39. [Modules] セクションの [Manage Modules] をクリックします。
40. [Module] の下にある [AssetManagerWebService] をクリックします。
41. [Class loader order] を [Classes loaded with local class loader first (parent last)] に変更します。
42. 変更の保存:
 - a. [Apply] をクリックします。
これによりページが再読み込みされます。
 - b. ページ上部の [Messages] 枠にある [Save] をクリックします。
43. WebSphere Application Serverを停止します。
44. WebSphere Application Serverを起動します。
45. セクション「[Asset Manager Web Serviceが正しく展開されたかどうかテストする](#)」に進みます。

Asset Manager Web Tierのインストール

ここでは、Asset Manager Web TierをAsset Manager Web Serviceとは別にインストールする方法について説明します。

Asset Manager Web ServiceとAsset Manager Web Tierを同時にインストールするには: [Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを同時にインストールする](#)

1. 展開するアーカイブファイル (**AssetManager.ear**) が、使用するカスタム構成で更新されていることを確認します。
「[アーカイブファイルを更新する](#)」参照。

注: 更新されたアーカイブファイルは、デフォルトでは「<Asset Managerインストールフォルダ>\weblogic」フォルダにあります。

2. WebSphere Application Serverを起動します。
3. WebSphere Application Serverの管理コンソールを開きます。
4. ナビゲーションバーで、[Applications / New Application] を選択します。
5. [New Application] ページで、[New Enterprise Application] をクリックします。
6. 次のフィールドに値を入力します。

パラメータ	値
Local file system/ Full path	「AssetManager.ear」ファイルへのパス。

7. インストール画面に移動します。手順 11: モジュールのメタデータで、[metadata-complete attribute] チェックボックスをオンにします。
8. [Finish] ボタンをクリックして、インストールを開始します。
9. すべてが正常に機能すると、トレースウィンドウにAssetManagerインストールが正常に実行されたことを示すメッセージが表示されます。
10. 該当するリンクをクリックして、変更を保存します。
11. ナビゲーションバーで、[Applications / Application Types / WebSphere enterprise applications] を選択します。
12. [AssetManager] を選択し、[Start] をクリックします。
13. WebSphere Application Serverを停止します。
14. 「\${APP_INSTALL_ROOT}<セルの名前>/AssetManager.ear/AssetManager.war/WEB-INF/lib」に移動します。
15. Web Tierの「WEB-INF\lib」フォルダの次のjarファイルをコピーして、外部フォルダ（「C:\IBM\WebSphere\shared-lib」など）に配置します。
 - jsf-api-2.1.6.jar
 - jsf-facelets-1.1.15.jar
 - jsf-impl-2.1.6.jar
 - commons-codec-1.5.jar
 - commons-logging-1.1.jar

- httpclient-4.5.2.jar
 - httpcore-4.4.4.jar
16. この外部フォルダ (C:\IBM\WebSphere\shared-libなど) で、次のディレクトリ構造を作成します。
com\sun\faces\application。この例では、パス全体がC:\IBM\WebSphere\shared-lib\com\sun\faces\applicationである必要があります。
 17. Web TierのWEB-INF\classes\com\sun\faces\applicationフォルダのすべてのファイルを、前の手順で作成したフォルダ (C:\IBM\WebSphere\shared-lib\com\sun\faces\applicationなど) にコピーします。
 18. 「\${APP_INSTALL_ROOT}/<セルの名前>/AssetManager.ear/AssetManager.war/WEB-INF/classes/Owasp.CsrfGuard.properties」ファイルを開きます。
 19. Owasp.CsrfGuard.propertiesファイルで、次のコードを変更します。変更前:


```
org.owasp.csrfguard.PRNG=SHA1PRNG
org.owasp.csrfguard.PRNG.Provider=SUN
```

 変更後:


```
org.owasp.csrfguard.PRNG=IBMSecureRandom
org.owasp.csrfguard.PRNG.Provider=IBMJCE
```
 20. WebSphere Application Serverを起動します。
 21. ナビゲーションバーで、[Environment / Shared Libraries] をクリックします。
 22. [New] ボタンをクリックします。
 23. 次のフィールドに値を入力します。

パラメータ	値
Name	am-shared-lib
Description	Asset Manager共有ライブラリ
Classpath	C:\IBM\WebSphere\shared-lib
Native Library Path	(このフィールドは空白にしておくこと)

- [Use an isolated class loader for this shared library] オプションがオンになっていることを確認します。
24. [OK] をクリックします。
 25. [Messages] 枠で [Save] リンクをクリックします。

26. ナビゲーションバーで、[Applications / Application Types / WebSphere enterprise applications] を選択します。
27. [Asset Manager] をクリックします。
28. [References] セクションの [Shared library references] をクリックします。
29. [AssetManagerWeb] (AssetManager.war, WEB-INF/web.xml) をオンにし、[Reference shared libraries] をクリックします。
30. 新規ライブラリ: [am-shared-lib] を選択します。
31. インストールウィザードの残りのステップを完了します。
32. [Save] ボタンをクリックします。
33. 変更を保存するには、[Apply] をクリックしてから [OK] をクリックします。
34. セクション「Asset Manager Web Tierが正しく展開されたかどうかテストする」に進みます。

WebLogicがアプリケーションサーバの場合

ここでは、Asset Manager Web ServiceをAsset Manager Web Tierとは別にインストールする方法について説明します。

注: Web Tier用に必要な最小限のJVMパラメータ:

```
-Xms1024m -Xmx1024m -XX:PermSize=128M -XX:MaxPermSize=256m
```

Web Service用に必要な最小限のJVMパラメータ:

```
-Xms1024m -Xmx1024m -XX:PermSize=128M -XX:MaxPermSize=256m
```

Java 8では、PermSizeをMetaspaceSizeに、MaxPermSizeをMaxMetaspaceSizeに置き換えます。

本番でのJVM設定の詳細については、『Asset Manager Deployment Sizing Guide』を参照してください。

Asset Manager Web ServiceとAsset Manager Web Tierを同時にインストールするには: [Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを同時にインストールする](#)

Asset Manager Web Serviceのインストール

1. 「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\bin」フォルダにある「aamapi96.dll」ファイルと「amjni96.dll」ファイルをコピーします。
2. コピーしたファイルを「\<jdk_weblogic>\jre\bin」フォルダに貼り付けます。ここで<jdk_weblogic>は、Asset Manager Web ServiceをインストールするWebLogicドメインに関連付けられたJDKフォル

ダへのパスに対応します。

例: 「C:\Oracle\Middleware\jrockit_160_29_D1.2.0-10\jre\bin」

- Asset Manager Web ServiceをインストールするWebLogicドメインの「**config**」フォルダに移動します (例: C:\Oracle\Middleware\user_projects\domains\<ドメイン名>\config)。
- 「**config.xml**」ファイルを編集します。
- 次のサブエントリ、

```
<enforce-valid-basic-auth-credentials>>false</enforce-valid-basic-auth-credentials>
```

を<**security-configuration**>エントリの最後に追加します。

- 「**config.xml**」ファイルで行った変更を保存します。
- 展開するアーカイブファイル(「**AssetManager-webservice.ear**」)が、使用するカスタム構成で更新されていることを確認します。
「[アーカイブファイルを更新する](#)」参照。

注: 更新されたアーカイブファイルは、デフォルトでは「<Asset Managerインストールフォルダ>\weblogic」フォルダにあります。

- Asset Manager Web ServiceをインストールするWebLogicドメインの**WebLogic Server**ドメインの**Admin Server**を起動します。
- Internet Explorerを起動します。
- 次のURLを開きます。

```
http://<Asset Manager Web Serviceサーバの名前またはIPアドレス>:<WebLogicドメインポート>/console
```

例: **http://localhost:7001/console**

WebLogic管理コンソールが表示されます。

- ユーザIDを入力します。
- メニューの左側で:
 - [**Lock & Edit**] ([**Change Center**] フレーム) をクリックします。
 - [**Deployments**] リンクをクリックします ([**Domain Structure**] フレーム)
- メイン画面の [**Control**] タブで [**Install**] ボタンをクリックします。
アプリケーションのインストールウィザードが開始します。
- 「**AssetManager-webservice.ear**」を選択し、[**Next**] をクリックします。
- [**Install this deployment as an application**] オプションを選択して、[**Next**] をクリックします。
- ウィザードの他のページに入力し、[**Finish**] をクリックして確定します。

17. メニューの左側で:
 - a. **[Activate changes]** (**[Change Center]** フレーム) をクリックします。
 - b. **[Deployments]** リンクをクリックします (**[Domain Structure]** フレーム)
18. メインウィンドウの **[Control]** タブで、Asset Manager Web Serviceの展開に対応するチェックボックスを選択します。
インストールが正常に完了すると、アプリケーションのステータスは **[Prepared]** に変わります。
19. **[Start/ Servicing all requests]** メニューを選択します。
アプリケーションのアクティブ化ウィザードが開始します。
20. **[Yes]** をクリックしてアクティブ化を確認します。
アプリケーションのステータスが **[Active]** に変わります。
21. セクション「**Asset Manager Web Serviceが正しく展開されたかどうかテストする**」に進みます。

Asset Manager Web Tierのインストール

1. 展開するアーカイブファイル (**AssetManager.ear**) が、使用するカスタム構成で更新されていることを確認します。

「[アーカイブファイルを更新する](#)」参照。

注: 更新されたアーカイブファイルは、デフォルトでは「<Asset Managerインストールフォルダ>\weblogic」フォルダにあります。

2. Asset Manager Web TierをインストールするWebLogicドメインの**WebLogic Server**ドメインの**Admin Server**を起動します。
3. Internet Explorerを起動します。
4. 次のURLを開きます。

http://<Asset Manager Web Tierサーバの名前またはIPアドレス>:<WebLogicドメインポート>/console

例: **http://localhost:7001/console**

WebLogic管理コンソールが表示されます。

5. ユーザIDを入力します。
6. メニューの左側で:
 - a. **[Lock & Edit]** (**[Change Center]** フレーム) をクリックします。
 - b. **[Deployments]** リンクをクリックします (**[Domain Structure]** フレーム)
7. メイン画面の **[Control]** タブで **[Install]** ボタンをクリックします。
アプリケーションのインストールウィザードが開始します。

8. 「AssetManager.ear」ファイルを選択し、[Next] をクリックします。
9. [Install this deployment as an application] オプションを選択して、[Next] をクリックします。
10. ウィザードの他のページに入力し、[Finish] をクリックして確定します。
11. メニューの左側で:
 - a. [Activate changes] ([Change Center] フレーム) をクリックします。
 - b. [Deployments] リンクをクリックします ([Domain Structure] フレーム)
12. メインウィンドウの [Control] タブで、Asset Manager Web Tierの展開に対応するチェックボックスを選択します。
インストールが正常に完了すると、アプリケーションのステータスは [Prepared] に変わります。
13. [Start/ Servicing all requests] メニューを選択します。
アプリケーションのアクティブ化ウィザードが開始します。
14. [Yes] をクリックしてアクティブ化を確認します。
アプリケーションのステータスが [Active] に変わります。
15. セクション「Asset Manager Web Tierが正しく展開されたかどうかテストする」に進みます。

Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを同時にインストールする

注: このインストール方法はテストモードのみで使用可能です。本番モードでは使用できません。本番モードでは、パフォーマンス上の理由で、Asset Manager Web ServiceとAsset Manager Web Tierは、2つの別々のアプリケーションサーバにインストールする必要があります。

これは、WebSphere Application ServerまたはWebLogicを使用している場合のみ可能です。Tomcatを使用している場合はできません。

WebSphere Application Serverのバージョンが7である場合、このインストール方法は使用できません。

以下では、Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを個別にインストールする方法について説明します。

単一の「.ear」を作成して、Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceを同時に同じサーバにインストールすることもできます。

これを行うには:

1. 以下で説明するように、Asset Manager Web TierとAsset Manager Web Serviceの「**package.properties**」ファイルのパラメータを変更します。
 - [Asset Manager Web Service用の「package.properties」パラメータ](#)
 - [Asset Manager Web Tier用の「package.properties」パラメータ](#)
2. Asset Manager Web Tierの「**package.properties**」ファイルの**combination.ear**パラメータが、**true**に設定されていることを確認します。
3. 「<Asset Managerインストールフォルダ>\webtier\package.properties」を使用して、「**AssetManager.ear**」を更新します。
[展開スクリプトを使用してアーカイブファイルを更新する](#)
4. 引き続き、これ以降の章で説明するAsset Manager Webの展開手順を実行します。

WebSphere Application Serverがアプリケーションサーバの場合

1. WebSphere Application Serverを起動します。
2. WebSphere Application Serverの管理コンソールを開きます。
3. ナビゲーションバーで、[**Environment / Shared Libraries**] をクリックします。
4. [**New**] ボタンをクリックします。
5. 次のフィールドに値を入力します。

パラメータ	値
Name	am-native-lib
Description	Asset Managerネイティブライブラリ
Classpath	.
Native Library Path	Asset Managerのバイナリディレクトリへのパス。例： <ul style="list-style-type: none"> ○ Asset Manager Webを32ビットOSに展開する場合： 「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\bin」。ここで、「xx」は、ご使用のAsset Managerの言語を表す2文字の言語コードです。 ○ Asset Manager Webを64ビットOSに展開する場合： 「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\x64」。ここで、「xx」は、ご使用のAsset Managerの言語を表す2文字の言語コードです。

6. [**OK**] をクリックします。
7. [**Messages**] 枠で [**Save**] リンクをクリックします。
8. ナビゲーションバーで、[**Applications / New Application**] を選択します。

9. **[New Application]** ページで、**[New Enterprise Application]** をクリックします。
10. 次のフィールドに値を入力します。

パラメータ	値
Local file system/ Full path	「AssetManager.ear」ファイルへのパス。

11. **[Next]** ボタンをクリックします。
12. **[Detailed: Show all installation options and parameters]** オプションを選択し、**[Next]** ボタンをクリックします。
Webアプリケーションをインストールするために実行する一連のステップが表示されます。
13. 手順4 (共有ライブラリのマップ): テーブルから、**[AssetManagerWebService]** (URI: AssetManagerWebService.war, WEB-INF/web.xml) を選択します。
14. **[Reference shared libraries]** ボタンをクリックします。
15. 新規ライブラリ: **[am-native-lib]** を選択します。
16. インストールウィザードの残りのステップを完了します。
17. **[Finish]** ボタンをクリックして、インストールを開始します。
18. すべてが正常に機能すると、トレースウィンドウにAssetManagerインストールが正常に実行されたことを示すメッセージが表示されます。
19. 該当するリンクをクリックして、変更を保存します。
20. ナビゲーションバーで、**[Servers / Server Types / WebSphere application servers]** を選択します。
21. 右側の枠にあるサーバをクリックします。
22. **[Applications]** セクションの **[Installed applications]** をクリックします。
23. アプリケーションの一覧から、**[AssetManager]** をクリックします。
24. **[Detail Properties]** で **[Application binaries]** をクリックします。
25. **[Location (full path)]** フィールドの値をメモします。
この値には、次のフォーマットが使用されます。\$(APP_INSTALL_ROOT)/<セルの名前>
この値は、あとで **[JVM Classpath]** フィールドに入力する際に必要になります。
26. ナビゲーションバーで、**[Servers / Server Types / WebSphere application servers]** を選択します。
27. 右側のパネルにあるサーバをクリックします。
28. 中央のページで、**[Server Infrastructure]** セクションの **[Java and Process Management]** の下にある **[Process definition]** オプションをクリックします。

29. 次のページで、[Additional Properties] セクションの [Java Virtual Machine] をクリックします。
30. 次のページで、以下の要領で [Classpath] フィールドに入力します。

値	-Djava.library.path=\$(APP_INSTALL_ROOT)/<セルの名前>/AssetManager.ear 注: \$(APP_INSTALL_ROOT)/<セルの名前>は、前のステップでメモした [Application binaries] フィールドの値です。
例	-Djava.library.path=\$(APP_INSTALL_ROOT)/PC1Node01Cell/AssetManager.ear

31. [Generic JVM arguments] フィールドに次のように入力します。

値	-Djava.library.path=<Asset Managerインストールフォルダ>\bin 注: Windowsの場合は、パスに対して短いファイル名を使用する必要があります(下の例を参照)。
例	-Djava.library.path=C:/Program Files/HPE/Asset Manager 9.60 en/bin

32. 変更の保存:
 - a. [Apply] をクリックします。
これによりページが再読み込みされます。
 - b. ページ上部の [Messages] 枠にある [Save] をクリックします。
33. ナビゲーションバーで、[Applications / Application Types / WebSphere enterprise applications] を選択します。
34. [AssetManager] をクリックします。
35. [Modules] セクションの [Manage Modules] をクリックします。
36. [AssetManagerWeb] をクリックします。
37. [Class loader order] フィールドの値を [Classes loaded with local class loader first (parent last)] に設定します。
38. [OK] をクリックします。
39. 該当するリンクをクリックして、変更を保存します。

40. WebSphere Application Serverを停止します。
41. WebSphere Application Serverを起動します。
42. セクション「[展開が成功したかどうかテストする](#)」に進みます。

WebLogicがアプリケーションサーバの場合

1. 「C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 xx\bin」フォルダにある「aamapi96.dll」ファイルと「amjni96.dll」ファイルをコピーします。
2. コピーしたファイルを「\<jdk_weblogic>\jre\bin」フォルダに貼り付けます。ここで<jdk_weblogic>は、Asset Manager Web ServiceをインストールするWebLogicドメインに関連付けられたJDKフォルダへのパスに対応します。
例: 「C:\Oracle\Middleware\jrockit_160_29_D1.2.0-10\jre\bin」
3. Asset Manager Web ServiceをインストールするWebLogicドメインの「config」フォルダに移動します (例: C:\Oracle\Middleware\user_projects\domains\<ドメイン名>\config)。
4. 「config.xml」ファイルを編集します。
5. 次のサブエントリ、

```
<enforce-valid-basic-auth-credentials>>false</enforce-valid-basic-auth-credentials>
```

を<security-configuration>エントリの最後に追加します。
6. 「config.xml」ファイルで行った変更を保存します。
7. セクション「[Asset Manager Web Tierのインストール](#)」の手順に進みます。

展開が成功したかどうかテストする

Asset Manager Web Serviceが正しく展開されたかどうかテストする

1. アプリケーションサーバを起動します。
2. Internet Explorerを起動します。
3. 次のURLを表示します。

http://<Asset Manager Web Serviceサーバの名前またはIPアドレス>:<Asset Manager Web Serviceポート>/AssetManagerWebService

例: **http://localhost:8080/AssetManagerWebService**

注意: テキストは大文字と小文字が区別されます。

注: アプリケーションサーバが異なれば、デフォルトのWebサービスポートも異なります。

4. Asset Manager Web Serviceが起動するまで、ページの再読み込み、または更新を行わないでください。これには数分かかる場合があります。
5. 正しく導入されると、URLのページに次のようなヘッダーが表示されます。

```
Database
Base: AMDemo96en
[User]: 「Admin」
Version: 9.60 - build xxxx
Dll path: C:\Program Files\HPE\Asset Manager 9.60 en\bin\aamapi96.dll
```

ヒント: ヘッダーの後にエラーが表示された場合、またはまったく表示されない場合は、アプリケーションサーバのメモリ設定が誤っている可能性があり、再設定が必要です。

Tomcatの例: [Initial memory pool] と [Maximum memory pool] の設定。

Asset Manager Web Tierが正しく展開されたかどうかテストする

1. アプリケーションサーバを起動します。
2. Internet Explorerを起動します。
3. 次のURLを表示します。

http://<Asset Manager Web Tierサーバ名>:<Asset Manager Web Tierポート>/AssetManager

例: **http://localhost:8080/AssetManager**

注意: テキストは大文字と小文字が区別されます。

注: アプリケーションサーバが異なれば、デフォルトのWeb Tierポートも異なります。

4. 正しく導入されると、上記のURLで接続ページが表示されます。

Asset Manager Webの設定

『Tailoring』ガイドの「Customizing Web clients」、「Modifying the Web client's default behavior」の章を参照してください。

『管理』ガイドの「データベースへのアクセスコントロール」の章、「Asset Managerデータベースへのユーザー認証を管理する」のセクションを参照してください。

Internet Explorerを使ったAsset Managerへのアクセス

『はじめに』ガイドの「Asset Managerを初めて使用する」の章、「Asset Managerの開始/Webクライアント」のセクションを参照

Asset Manage Webの最適化

注意: このセクションは、これからお使いになるアプリケーションとWebサーバのガイドの代替となるものではありません。

上記のガイドとユーザの知識と経験を組み合わせることで、アプリケーションサーバとWebサーバを最適な方法でインストール、設定することが出来るようになります。

このセクションでは、いくつかのヒントを提供しますが、完全な一覧ではありませんのでご注意ください。

Asset Manager Webの最適化の詳細については、『Asset Manager Web Implementation』ガイドの「Performance Tips and Problem Diagnosis」の章を参照してください。

Tomcatのログファイル

Tomcatで非常に詳細なログファイルが生成されるように設定すると、数千もの無意味な行がログ記録されてしまいます。

Asset Managerのパフォーマンスを低下させるだけです。

この問題を回避するためのTomcatの設定例:

1. Tomcatの「**webapps**」フォルダに移動します。
2. 必要に応じて「**AssetManager**」フォルダを削除します。
3. **webapps\AssetManager.war_build**フォルダ内の「**AssetManager.war**」ファイルを圧縮解除します。
4. 新規設定ファイルを作成して、「**log4j.properties**」(場所は「**AssetManager.war_build\WEB_INF\classes**」フォルダ)と置換します。

例: **log4jnew.properties**

5. 「**web.xml**」の**log.properties**エントリ(場所は**AssetManager.war_build\WEB_INF**)を変更して、新しい「**log4jnew.properties**」ファイルを参照するようにします。
6. 新しいファイル、「**log4jnew.properties**」を開きます。
7. 致命的エラーのみログを作成する設定を入力します。

例:

```
log4j.rootLogger=FATAL, A1
log4j.appender.A1=org.apache.log4j.ConsoleAppender
log4j.appender.A1.layout=org.apache.log4j.PatternLayout
log4j.appender.A1.layout.ConversionPattern=%d{ABSOLUTE} %-5p %c{1} :%m%n
log4j.logger.org.apache=FATAL
Apacheのlog4jドキュメント参照。
```

8. Tomcatの「**webapps\AssetManager.war_build**」フォルダを参照します。
9. すべてのファイルとフォルダを選択します。
10. これらのファイルとフォルダを「**webapps\AssetManager.war_build\AssetManager.war**」ファイルに圧縮します。
11. ファイルをコピーします。
12. それを「**webapps**」フォルダに貼り付けます(以前のファイルに上書きします)。
13. 「**webapps\AssetManager.war_build**」フォルダを削除します。

Tomcatによって生成されるページの表示にかかる時間

Internet ExplorerでWebクライアントのページを表示する場合、初めてアクセスするページの表示にしばらく時間がかかることがあります。

これは次の理由によるものです。

Tomcatの「**work**」フォルダ内で記述されていないページをユーザが要求すると(たとえば場所のリストなど)、Asset Manager Web Tierは「.jsp」ファイルと、この「.jsp」ファイルからコンパイルされる「.class」ファイルを生成します。表示するページはこれらのファイルによって記述されます。

この動作にはしばらく時間がかかります。

Tomcatの「**work**」フォルダ内ですでに記述されているページをユーザが要求した場合、対応する「.jsp」ファイルと「.class」ファイルをAsset Manager Web Tierが再度生成するのは、Asset Managerデータベースの構造内でページの記述が変更されている場合だけです。

ページが変更されていなければ、Internet Exploreですぐに表示されます。

注: ページの表示速度を高めるために、シャットダウンの際に「**work**」フォルダ内の「.jsp」ファイルと「.class」ファイルを保持するように、Tomcatを設定することを推奨します。方法については、Tomcatのドキュメントを参照してください。

ネットワークパフォーマンス

Webクライアントは、256kbitsネットワークで、400msのping (200msのネットワークレイテンシ) で正常にテストを行えました。

さまざまな読み込み時間の一覧を以下に挙げます。

アクション	読み込み対象
一覧の表示	40KB
詳細の表示	複雑さに応じて50から100KBの間 (従業員や部門であれば50KB、ポートフォリオ品目であれば90KBなど)
一覧での選択 例、ポートフォリオ品目の詳細にある以下のフィールドとリンクを変更します。 <ul style="list-style-type: none"> • 割り当て (seAssignment) • ユーザ (User) • 場所 (Location) • 責任者 (Supervisor) 	1.2MB
発注の作成	530KB (6KBをクライアントからサーバへ。残りはサーバからクライアントへ)
ポートフォリオ品目の作成、および一覧を参照することによる場所、ユーザ、責任者の選択	1.8MB (10KBをクライアントからサーバへ。23往復)

Asset Manage Webのアンインストール

Apache Tomcatがアプリケーションサーバの場合

Asset Manager Web ServiceまたはAsset Manager Web Tierが導入されているTomcatの各インスタンスに対して:

1. Tomcatを停止します。

注意: Tomcatを停止しなければ、Asset Manager Web ServiceとAsset Manager Web Tierのいくつかのファイルを削除することができません。

これはTomcatの既知のエラーです。

<http://tomcat.apache.org/faq/windows.html#lock>

2. Tomcatの「temp」フォルダ内のファイルを削除します。
3. Tomcatの「work」および「webapps」フォルダで、「AssetManager」および「AssetManagerWebService」フォルダを手動で削除します。

WebSphereがアプリケーションサーバの場合

Asset Manager Web ServiceまたはAsset Manager Web Tierをアンインストールするには:

1. WebSphere Application Serverを起動します。
2. WebSphere Application Serverの管理コンソールを開きます。
3. ナビゲーションバーで、[Applications / Application Types / WebSphere enterprise applications] をクリックします。
4. [AssetManager] または [AssetManagerWebService] の前のボックスを選択します。
5. [Stop] をクリックします。
6. [AssetManager] または [AssetManagerWebService] の前のボックスを選択します。
7. [Uninstall] をクリックします。

8. [OK] をクリックして確定します。
9. ページ上部の [Messages] 枠にある [Save] リンクをクリックします。
10. ナビゲーションバーで、[Environment / Shared Libraries] をクリックします。
11. [am-native-lib] の前のボックスを選択します。
12. [Delete] をクリックします。
13. [Messages] 枠で [Save] リンクをクリックします。
14. 導入されたAsset Manager Web ServiceおよびAsset Manager Web Tierを削除します。(Asset Manager「.jar」ファイルをC:\IBM\WebSphere\shared-libフォルダから削除します。)
15. WebSphere Application Serverを再起動して、変更を有効にします。

WebLogicがアプリケーションサーバの場合

将来 Asset Manager Web Serviceを正しく再インストールできるようにするには、既存のAsset Manager Web ServiceをWebLogicドメインから削除した後で、WebLogicドメインを再起動する必要があります。

問題

Asset Manager Web

問題

新しいバージョンのAsset Managerにアップグレードした後で、Asset Manager Webクライアントでロードされない。

解決策

1. Asset Manager Web展開を削除します。
[Asset Manager Webのアンインストール](#)

2. Asset Manager Web 9.60のインストール

[Asset Manager Webのインストール](#)

Tomcatで実行されるAsset Manager Web Tier

問題

Tomcatが正しく停止しない。

TomcatがWebクライアントを開始できない。

解決策

1. Tomcatを停止します
2. Tomcatのインストールフォルダにある「**work\Catalina\localhost\AssetManager**」サブフォルダを削除します
3. Tomcatを開始します

解決しない場合、Asset Manager Web Tierを再導入してください。

ヒント: C:\Tomcat70\logsなどで、エラーの詳細がないかTomcatログを確認してください。

第9章: 「.ini」、「.cfg」および「.res」ファイル

使用可能な「.ini」、「.cfg」および「.res」ファイル	112
「.ini」ファイルを変更する	116
「am.ini」ファイルのエントリ	117
「amsrv.ini」ファイルのエントリ	119
「amsrvcf.ini」ファイルのエントリ	120
「amexp.ini」ファイルのエントリ	120
「amdb.ini」ファイルのエントリ	120
「.ini」ファイルの変更を抑制する	122

Asset Managerスイートに属するプログラムは、設定ファイル(「.ini」および「.cfg」の拡張子)およびリソースファイル(「.res」の拡張子)に関連付けられています。

使用可能な「.ini」、「.cfg」および「.res」ファイル

使用できる主な「.ini」および「.cfg」ファイルの一覧を次に示します。

「.ini」および「.cfg」ファイル - 主なファイルの一覧

プログラム (Windowsでは「.exe」または「.dll」を追加し、Linuxではおそらく「.so」を追加)	「.ini」または「.cfg」ファイル	説明
Asset Manager am	aamdsk96.ini	ユーザ表示オプション すべてのウィンドウをデフォルト設定に戻す場合は、このファイルを削除します。
	am.ini	Asset Managerユーザオプション
Asset Manager Application Designer	amdba.ini amdbal.ini	Asset Manager Application Designerユーザオプション

「.ini」および「.cfg」ファイル - 主なファイルの一覧 (続き)

プログラム (Windowsでは「.exe」または「.dll」を追加し、Linuxではおそらく「.so」を追加)	「.ini」または「.cfg」ファイル	説明
amdba amdbal		ユーザ表示オプション
Asset Manager Export Tool amexp amexpl	amexp.ini amexpl.ini	Asset Manager Export Toolユーザオプション ユーザ表示オプション
Asset Manager Import Tool amimpl	amimpl.ini	Asset Manager Import Toolユーザオプション ユーザ表示オプション
Asset Manager Script Analyzer amsg	amsg.ini	Asset Manager Script Analyzerユーザオプション ユーザ表示オプション
Asset Manager Automated Process Manager amsrv amsrvl	amsrv.ini amsrv.cfg amsrvl.ini	Asset Manager Automated Process Managerユーザオプション ユーザ表示オプション
	amsrvcf.ini	Webサーバとして稼動するAsset Manager Automated Process Manager用パラメータ
Asset Manager API aamapi96	aamapi96.ini	プログラムユーザオプション
次のプログラムのすべて	amdb.ini	データベース接続のリスト
	mail.ini	Asset Managerメッセージシステムの設定

「.ini」および「.cfg」ファイル - 主なファイルの場所

「.ini」または「.cfg」ファイル	場所
aamdisk96.ini am.ini amdba.ini am.ini	Windows (NTファミリ) の場合: 「\Documents and Settings\<Windowsのユーザ名>\Application Data\HPE\AssetManager\conf」フォルダ内

「.ini」および「.cfg」ファイル - 主なファイルの場所 (続き)

「.ini」または「.cfg」ファイル	場所
amdba.ini amdbal.ini amexp.ini amexpl.ini amimpl.ini amsmsg.ini amsrv.ini amsrvl.ini aamapi96.ini	<p>Windows Vista以上 (Windows 7、Windows Server 2008を含む) の場合: 「\Users\<windowsのユーザー名>\AppData\Roaming\HPE\AssetManager\conf」フォルダ内</windowsのユーザー名></p> <p>注: aamapi96.iniは、手動で作成する必要があります。アプリケーションサーバが「Local System」で始まっている場合、ファイルは<Windowsフォルダ>\System32\config\systemprofile\AppData\Roaming\HPE\AssetManager\confフォルダに作成する必要があります。アプリケーションサーバがその他のユーザーアカウントで始まっている場合、ファイルは\Users\<windowsユーザー>\appdata\roaming\hpe\assetmanager\confフォルダに作成する必要があります。< p=""> <p>Linuxの場合: 「~/HPE/AssetManager/conf」フォルダ</p> </windowsユーザー>\appdata\roaming\hpe\assetmanager\confフォルダに作成する必要があります。<></p>
amsrv.cfg amsrvcf.ini	<p>「amsrv」実行可能ファイルと同じフォルダ</p> <p>注: 旧バージョンのAsset Managerからアップグレードしている場合、「amsrv.cfg」が実行可能ファイル「amsrv」の親フォルダにある場合があります。これでも機能します。</p>
amdb.ini	<p>Windows (NTファミリ) の場合: 「\<Documents and Settings>\All Users\Application Data\HPE\AssetManager\conf」フォルダ内</p> <p>Windows Vista以上 (Windows 7、Windows Server 2008を含む) の場合: 「\ProgramData\HPE\AssetManager\conf」フォルダ内</p> <p>Linuxの場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> システム接続: 「/var/opt/HPE/AssetManager/conf」フォルダ ユーザー接続: 「~/HPE/AssetManager/conf」フォルダ
mail.ini	<p>Windows (NTファミリ) の場合: 「\<Documents and Settings>\All Users\Application Data\HPE\AssetManager\conf」フォルダ内</p> <p>Windows Vista以上 (Windows 7、Windows Server 2008を含む) の場合: 「\ProgramData\HPE\AssetManager\conf」</p> <p>Linuxの場合: 「~」フォルダ</p>

また、これらのファイルの一部が含まれるフォルダは、以下を行ってAsset Manager Windowsクライアントでも確認できます。

1. Windowsクライアントを起動します。
2. [Asset Managerのバージョン情報...] ウィンドウを表示します ([ヘルプ/ Asset Managerのバージョン情報...] メニュー)。
3. [詳細...] ボタンをクリックします。
4. 表示されるウィンドウの [ソフトウェア] ブランチに、.iniファイルのインストールフォルダが表示されます。
 - **Asset Manager接続の定義ファイル (システム)** は、「amdb.ini」インストールフォルダ (システム接続) に対応します。
 - **Asset Manager接続の定義ファイル (ユーザ)** は、「amdb.ini」インストールフォルダ (ユーザ接続) に対応します。
 - **INI**は、アプリケーションが使用する「.ini」ファイルのインストールフォルダに対応します。

表 8.3.「.res」ファイル - 主なファイルの一覧

「.res」ファイルには、Asset Managerプログラムの文字列 やアイコンなどのリソース情報が含まれています。

注: リソースファイルは、Asset Managerインストールの言語によって変わる可能性があります。

「.res」ファイルは、リソースファイルエディタでカスタマイズできます。ただし、「.res」ファイルを不適切に変更すると、予期しない問題が発生する可能性があります。「.res」ファイルを編集する場合、必ずファイルのバックアップを取るようにしてください。

プログラム (Windowsでは「.exe」または「.dll」を追加し、Linuxではおそらく「.so」を追加)	「.res」ファイル
Asset Manager am	am.res
Asset Manager Application Designer amdba amdbal	amdba.res amdbal.res
Asset Manager Export Tool amexp amexpl	amexp.res amexpl.res
Asset Manager Import Tool amimpl	amimpl.res
Asset Manager API	aamapi<バージョン>.res

(続き)

プログラム (Windowsでは「.exe」または「.dll」を追加し、Linuxではおそらく「.so」を追加)	「.res」ファイル
aamapi<バージョン>	
ADBC adbc	adbc.res
Asset Manager Automated Process Manager amsrv	amsrv.res

「.ini」ファイルを変更する

「.ini」ファイルのエントリは以下のような場合に変更される可能性があります。

- プログラムにより自動的に変更: 変更を確定したときまたはプログラムを終了するときに保存されます。後者の場合、[ファイル/終了]を使ってアプリケーションを終了しない場合は、変更は保存されません。
- 手動で変更

可能な限り、「.ini」ファイルエントリは、Asset Managerと関連プログラムを使って変更することをお勧めします。

ただし、手動でしか作成および変更できない「.ini」ファイルエントリもあります。

注: 「.ini」ファイルの手動による変更は複雑な作業なので、十分な知識をもったユーザのみが行ってください。

以下の表は、変更する「.ini」ファイルのエントリを表しています。これらのエントリは手動でのみ変更できます。

注: これらの表は、.iniファイルのエントリの一部だけを紹介しています。すべてのエントリが記載されているわけではありません。この表にないセクションやエントリは、手動で変更してはいけません。

ブール型のエントリの値を「1」または「0」で記しています。「1」や「0」の代わりに「True」や「False」という表現も使えます。

「am.ini」ファイルのエントリ

[OPTION] セクション

[OPTION] セクション

エントリ	説明
bSaveOptionOnExit	Asset Managerの終了時に[オプション]セクションの変更されたエントリを保存しない場合は、これを"0"に設定します。 デフォルトでは、変更内容は保存されます。
CallDelayMax	応答画面の経過時間インジケータで表示できる合計時間。 単位: 秒 デフォルト値: 60秒
CallDelayOrange	応答画面で経過時間インジケータの色がオレンジ色になるまでの時間。 単位: 秒 デフォルト値: 20秒
CallDelayRed	応答画面で経過時間インジケータの色が赤色になるまでの時間。 単位: 秒 デフォルト値: 40秒
CallerDefaultTicket	応答画面の上の方の[チケット]フィールドに、依頼主の最新のオープンチケットを入力できるようにします(チケットをオープンした日付に基づく)。 次の2つの値のどちらかに設定できます <ul style="list-style-type: none">• 1: [チケット]フィールドに入力する。• 0: [チケット]フィールドに入力しない。 デフォルト値: 0
CmdComboLines	ツールバーから選択可能なビューおよびアクションのリストに表示する項目数を制限します。
CNtbkTabCfg.bShowFlyby	詳細画面でタブのヒントを表示します。

[OPTION] セクション (続き)

エン트리	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • 0: いいえ • 1: 表示する
g_IHelpDeskUpdateTimeout	<p>データ入力ゾーン内でカーソルをフィールド間で移動したとき、またはヘルプゾーンでデータを選択したときの、応答画面の情報の更新時間。</p> <p>単位: ミリ秒</p> <p>デフォルト値: 1000ミリ秒 (=1秒)</p>
KeyIniFileName	<p>「aamdisk96.ini」ファイルのパスを指定します。</p> <p>例:</p> <pre>KeyIniFileName=aamdisk96.ini</pre> <p>Asset Managerでは、ネットワークドライブに配置されているファイル「aamdisk96.ini」を使用します。この場合、このファイルを読み取り専用として設定し、ユーザが設定を変更できないようにすることができます。</p>
NewMailLastCheck	<p>Asset Managerメッセージが最後に読み取られた時間。</p> <p>単位: 1970年1月1日午前0時から経過した秒数</p>
opt_bAskForConcurrentModifications	<p>このエン트리によって、別のユーザが同じレコードを同時に変更しているときに、ユーザが[変更] ボタンをクリックした場合、Asset Managerが確認ダイアログボックスを表示するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1: 確認ダイアログボックスを表示する。 • 0: 確認ダイアログボックスを表示せず、変更をただちに保存する。
opt_bCommitDeletesOneByOne	<p>このオプションは、レコードをまとめて削除するときに役立ちます。有効な場合、Asset Managerはレコードを次々と消去します(レコードごとに1つのトランザクション)。そうではない場合、Asset Managerは単一のトランザクションで複数のレコードを消去します。</p> <p>デフォルト値: 0</p>
opt_ImportCacheSize	<p>照合更新キーを使ってデータをインポートするときに、インポートパフォーマンスを改善するのに使用するキャッシュメモリのサイズを設定します。</p> <p>単位: 検出されたレコード数</p> <p>デフォルト値: 100</p>

[OPTION] セクション (続き)

エン트리	説明
StartSunday	週を月曜日 から始めるか (StartSunday=0)、日曜日 から始めるか (StartSunday=1) を指定します。 このオプションは、カレンダーで使われます。

[SQL] セクション

[SQL] セクション

エン트리	説明
OracleDLL	Oracleと対話するために読み込むOracle DLLの名前を設定します。

「amsrv.ini」ファイルのエン트리

[OPTION] セクション

[OPTION] セクション

エン트리	説明
MaxRentPerTrans	このエント리는、賃貸料の作成に使われます。 トランザクションごとの賃貸料の最大計算数を設定します。 デフォルト値: 200
MaxMsgInList	Asset Manager Automated Process Managerのメインウィンドウリストに表示される行数を設定します。 デフォルト値: 5000
<モジュール>LastCheck	LastCheckという接尾語を持つ行は、モジュールの最後の実行日に対応します。 Asset Manager Automated Process Managerの再起動時に次のモジュールの実行を計算することができます。
ここで、<モジュール>は次の値に設定することができます。Alarms、CostCenter、HDAIarms、History、LostVal、Rent、Stats、Stock、TimeZone、UpdateToken、WkGroup、WkGroup <xxx>、	

[OPTION] セクション (続き)

エントリ	説明
WorkflowFinder	実行グループ<xxx>が存在しなくなった場合、プログラムによって自動的に削除されないため、「WkGroup <xxx> LastCheck」行 (または、実行グループなしのワークフロースキームがない場合は「WkGroupLastCheck」行) を削除しておく便利です。

「amsrvcf.ini」ファイルのエントリ

「amsrvcf.ini」ファイルのエントリについては、インストールで作成されるこのファイル自身に記述されていません。

「amexp.ini」ファイルのエントリ

[OPTION] セクション

[OPTION] セクション

エントリ	説明
MaxOldDoc	[ファイル] メニューに保持される最近使用したファイルの最大表示数。

「amdb.ini」ファイルのエントリ

Asset Manager接続を記述する各セクションの次のエントリの変更が必要な場合があります。

「amdb.ini」ファイルのエントリ

エントリ	説明
AmApiDll	Asset Managerの「aamapi96」API DLLへのパスを設定します。 このエントリはHPE Connect-Itで使用されます。

「amdb.ini」ファイルのエントリ (続き)

エントリ	説明
FetchingArraySize	<p>SQLステートメントの実行時に読み込む行数。</p> <p>デフォルト値: 30</p>
OdbcLockingTime	<p>Microsoft SQL Serverデータベースの場合、レコードが別のユーザによってロックされたと見なされるまでの時間を設定します。</p> <p>単位: 秒</p> <p>デフォルト値: 60</p> <p>注意: この値が小さすぎると、処理量の多いサーバで実行する場合にインポートが中断されることがあります。</p>
OldStyleCatalog	<p>Oracleデータベースの場合、このエントリで、デフォルトの「All_Catalog」ビューの代わりに「Tab」ビューを使用することを強制できます。</p> <p>次の2つの値のどちらかに設定できます</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1: 「Tab」を使う。 • 0: 「All_Catalog」を使う。
OraFirstRowsHint	<p>Oracleデータベースでのみ使用されます。</p> <p>OraFirstRowsHintエントリでは、リストの[インデックスの強制使用]表示パラメータがオンになっている場合に使用されるSQLヒントを制御できます。</p> <p>指定しない場合、デフォルト値はFIRST_ROWS(100)になります。これは、別の値(通常、OraFirstRowsHint=FIRST_ROWS(10)またはOraFirstRowsHint=FIRST_ROWS(1))に設定可能で、ヒントは生成されるSQLに次のように追加されます。</p> <pre>SELECT /*+ FIRST_ROWS(1) */L1.lIconId, L1.lLocaId, L1.Name, L1.BarCode FROM amLocation L1 ORDER BY L1.lSocId</pre> <p>[インデックスの強制使用]がオフの場合、FIRST_ROWSヒントは次のクエリには追加されません。</p> <pre>SELECT L1.lIconId, L1.lLocaId, L1.Name, L1.BarCode FROM amLocation L1 ORDER BY L1.lSocId</pre> <p>調整の考慮事項の詳細については、『Tuning』ガイドおよび『Asset Manager Web Monitoring』ホワイトペーパーを参照してください。</p> <p>注: このパラメータを変更すると、クエリのパフォーマンスに影響を与えることがあります。最初にテスト環境で検証してください。</p>

「.ini」ファイルの変更を抑制する

「.ini」ファイルは、オプション変更時にそれぞれのアプリケーションによって自動的に変更されます。

複数の実行可能ファイルまたは実行可能ファイルの複数のインスタンスが同じ「.ini」ファイルに関連付けられている場合、最後に変更を保存した実行可能ファイルの変更内容が書き込まれます。

これらの変更を抑制したい場合は、「.ini」を読み取り専用にすることをお勧めします。

これは、特に「**aamapi96.ini**」ファイルに当てはまります。

第10章: OpenSSLとOpenLDAPを使用する

Asset Managerでは、次のOpenSSLライブラリファイルとOpenLDAPライブラリファイルが更新済みバージョンで置き換えられるため、最新バージョンのAsset ManagerとConnect-Itとの間で互換性が確保されます。

オペレーティングシステム	更新前のバージョン	更新後のバージョン
32ビット Windows	libeay32.dll	libeay32-10.dll
	ssleay32.dll	ssleay32-10.dll
64ビット Windows	libeay64.dll	libeay64-10.dll
	ssleay64.dll	ssleay64-10.dll
32ビット および64ビットのLinux	libcrypto.so	libcrypto-10.so
	libssl.so	libssl-10.so

Asset Managerで独自のOpenSSLライブラリを使用する場合、.dllファイルまたは.soファイルのファイル名に「-10」を追加する必要があります。たとえば、「libeay32.dll」ファイルの名前を「libeay32-10.dll」に変更する必要があります。

Asset Manager 9.40以降のバージョンでは、FIPS対応のOpenSSLのみサポートされます。Asset ManagerでFIPSを有効または無効にするには、次のいずれかの方法を使用します。

Windowsクライアント

1. [編集]メニューで、[オプション]をクリックします。
2. [オプション]ウィンドウで、[高度モード]を展開し、[FIPSモード]をクリックして、値を[はい]または[いいえ]に変更してFIPSを有効または無効にします。

Webクライアント

「conf」フォルダ内の「aamapi96.ini」ファイル (linuxの場合、「libaamapi96.ini」ファイル) を編集して、次の行を「Option」セクションに追加します。

```
/Advanced/FIPSMODE=<値>
```

注: プレースホルダ<値>には、2つの値があります。FIPSを有効にするには、1に変更し、FIPSを無効にするには、2に変更します。

第11章: パフォーマンスの考慮事項

概要

Asset Managerのパフォーマンスは以下のようなさまざまな要因に左右されます。

- DBMS:
 - ハードウェア
 - 設定
この作業は重要ですが、非常に扱いにくいものであるため、実行するにはデータベース管理者のスキルが必要になります。DBMSのパラメータ設定によってはAsset Managerの性能が倍増することもあるではありません。特に、データベースサーバに割り当てるRAM容量に注意を払うことが大切です。
 - DBMSの能力 (Asset Managerとの運用性)とミドルウェアの能力 (複数の行を1つのネットワークパケットとして取得するなどの高度な機能のサポート)
- サーバのハードウェアパフォーマンス: プロセッサ速度、RAM、ディスクのサブシステム (ディスク、コントローラボード、これらのシステム管理、プロセッサ数など)、テーブルとインデックスでの別のストレージデバイスの使用。
- クライアントのハードウェアパフォーマンス: プロセッサ速度、RAM、グラフィックパフォーマンス
- 帯域幅とネットワークの遅延時間
- データベースに格納されているレコード数

Asset Managerのパフォーマンスを最適化する方法については、『**Tuning**』ガイドを参照してください。

低速ネットワーク、高速ネットワークと広域ネットワーク (WAN) の調整

詳細については、『**管理**』ガイドの「WANネットワークにおけるAsset Managerの最適化」の章を参照してください。

外部アプリケーションを使ってAsset Managerデータベースのレコードをロックする

外部ツールによっては、レコードを参照している最中でもレコードをロックすることがあります。

これは、Asset Managerの性能に悪影響を及ぼします。レコードは、なるべくロックしないようにしてください。

たとえば、Microsoft SQL Serverでは、**ダーティリード (dirty read)** でアクセスする方が適しています。

ドキュメントのフィードバックの送信

本ドキュメントについてのご意見、ご感想については、電子メールでドキュメント制作チームまでご連絡ください。このシステムで電子メールクライアントが設定されている場合は、このリンクをクリックすることで、以下の情報が件名に記入された電子メールウィンドウが開きます。

フィードバック: インストールとアップグレード (Asset Manager 9.60)

本文にご意見、ご感想を記入の上、[送信]をクリックしてください。

電子メールクライアントが利用できない場合は、上記の情報をコピーしてWebメールクライアントの新規メッセージに貼り付け、ovdoc-ITSM@hpe.com宛にお送りください。

お客様からのご意見、ご感想をお待ちしています。